

ペトルヒンツェフ, N. N. 二つの近代化された軍事
改革とロシア社会への影響

メタデータ	言語: jpn 出版者: 駿台史学会 公開日: 2021-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 豊川, 浩一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21645

【翻 訳】

二つの近代化された軍事改革と ロシア社会への影響

ペトルヒンツェフ, N. N.
(翻訳・解説: 豊川浩一)

要旨 ヨーロッパ史および世界史における16～17世紀の軍事改革と「軍事革命」の役割については、歴史上上疑う余地のないほど重要である。それらは17～18世紀のヨーロッパの国家・社会構造の変化を引き起こした最も強力なメカニズムのひとつとしてはっきりと現れており、ロシアも例外ではなかった。すなわち、ロシアの国境の広大な拡がり、および遊牧世界と隣接していることにより、「軍事的ファクター」はほとんどいつもロシア史上では本質的な役割を果たし、ロシア社会に対して重大な影響を及ぼしてきた。

以上のファクターの影響はすでに16世紀には本質的なものとなっていたが、17・18世紀においてはとくに重要なものであった。その明白な例が二つの「近代化された」軍事改革である。それらは全体としてその軍事改革と同時代の全ヨーロッパ的な「軍事革命」の共通の傾向を反映し、アレクセイ・ミハイロヴィチとピョートル一世父子によって実行されたのである。

父と子の軍事改革には多くの共通点があった。ピョートルの治世下と同様、アレクセイ・ミハイロヴィチの軍事改革は外交的諸課題の解決によって生じた。アレクセイ・ミハイロヴィチの軍事改革は、ピョートル改革の規模の面で引けを取らないものであり、非常に短い期間で遂行され、決められた計画に基づいてなされたものではなく、徐々に、軍隊の補充、資金調達そして給与という諸原則の若干の変更を伴った軍隊改革の幾つかの「波」によってなされたものである。ピョートルの軍事改革は、軍事組織の観点からすると、多くの点で父の軍事改革によって準備されていた。軍事勤務の新しい原則はアレクセイ・ミハイロヴィチの改革の中にその深い根源を持っていたのである。

しかし他方、二つの改革の間にはロシア社会に深く影響を及ぼす極めて重大な原理上の幾つかの差異も存在した。アレクセイ・ミハイロヴィチは軍事改革の過程ではいまだ社会構造の断固たる破壊という手段に訴えることはできなかった。その時点では、社会構造は依然として十分に不可欠で保守的なものであった。社会では、「官位保有者のシンフォニー」、および彼らはさまざまな義務を有するという社会全体を貫く伝統的な心理が強かった。結局のところ、ツァーリ自身もそうした心理を共有していたのである。ピョートルの軍事改革はアレクセイ・ミハイロヴィチのそれとは原則的に異なっていた。ピョートルの改革は18世紀ロシアが発展する上で、新たなベクトルを規定する軍事・社会構造のより深化した近代化および西欧化へと向かわせることになる。しかし深化した近代化そのものは、アレクセイ・ミハイロヴィチの「移行期」の改革の段階なくしては不可能であった。

キーワード: アレクセイ・ミハイロヴィチ, ピョートル一世, 軍事改革, 社会構造の変化

はじめに

ヨーロッパ史および世界史における16～17世紀の軍事改革と「軍事革命」の役割の重要性の認識については、1950年代のマイケル・ロバートの仕事から始まるものの、歴史学上疑う余地のないところである⁽¹⁾。それらは17～18世紀のヨーロッパの国家・社会構造の変化を引き起こした最も強力なメカニズムのひとつとしてはっきりと現れたが、ロシアも例外ではなかった⁽²⁾。すなわち、ロシアの国境の広大な拡がり、および遊牧世界と隣接していることにより、「軍事的ファクター」はほとんどいつもロシア史上では本質的な役割を果たし、ロシア社会に対して重大な影響を及ぼしてきた。

このファクターの影響はすでに16世紀には本質的なものとなっていたが、17・18世紀においてはとくに重要であった。その明白な例が二つの「近代化された」軍事改革である。それらは全体としてその軍事改革と同時代の全ヨーロッパ的な「軍事革命」の共通の傾向を反映し、17世紀後半と18世紀初頭という半世紀の間隔をあけて父と子—すなわちアレクセイ・ミハイロヴィチとピョートル一世—によって実行されたのである。

残念ながら、これらの軍事改革については必ずしも徹底的に研究されているわけではなく、またお互い同士をほとんど関連させてもいない。その主な理由は、第1に、史料上顕著になった17世紀と18世紀の明確な境界について、その時代の歴史の専門家たちがお互いに深く関わっていないことがあげられる。第2に、17世紀後半のロシア史についての研究がまだ不十分であり、17世紀後半の社会経済的、政治的そして軍事的な変革もあまり研究されていない。そのことがこの時代的な境界の明瞭性について敏感にさせ、ピョートル一世によって創設されたものをまったく新しいという幻想を抱かせているのである。

以上のことは、まず何よりもロシアの近代化・ヨーロッパ化を結びつけるピョートル一世による諸改革の中で遙かに顕著になった軍事改革についても完全に当てはまるのである。

しかしこうしたステレオタイプの影響のもとでは、ロシアの近代化における他のタイプとその共通する過程は根本的に過小評価されている。

いずれにせよ以下に見るように、近代化はロシア史のほとんど確固たるファクターであった。

すでにイヴァン三世とイヴァン四世（雷帝）は、積極的にヨーロッパの経験を利用し、ヨーロッパの専門家（建築家、技師、軍事専門家、医者）たちをロシアの勤務に就かせた⁽³⁾（たとえば、イワン雷帝の時代について重要な史料の一つはオプリチニク〔イヴァン雷帝による独裁的政策を遂行した親衛隊。鍵括弧は訳者の補注〕のゲンリヒ・シュターデンに関するものである⁽⁴⁾）。

こうした専門家たちはボリス・ゴドゥノフの治世でも、また動乱時代でも利用された。その証拠は動乱時代に関する重要な史料の一つとなっている『手記』を著した有名なヤコブ・マル

ジェレ大尉である⁽⁵⁾。

さらに、ミハイル・フョードロヴィチ帝治世下のスモレンスク戦争（1632～34年）の時代とその前夜、ロシアは、軍隊のヨーロッパ化を方向付けることになる⁽⁶⁾、軍事改革の最初の重要な試みに着手した。それはアレクセイ・ミハイロヴィチのより大規模な改革のプロローグとなった。B. Ф. ポルシネフの見解によると、ロシア当局が戦争に突入することを決めてから、「近代化する」軍事改革に初めて着手することになり、同様に軍事改革を遂行しつつ、将校の幹部たちや軍事技術による直接的な援助をする上で、当時のスウェーデンは重要な影響を及ぼしていた⁽⁷⁾。

結局、少なくとも16世紀末から、ほとんどいつもかなりの数の外国人専門家（何よりも軍事専門家⁽⁸⁾）がロシアに存在していたのである。彼らを管理するために、専門的な官署である外国人官署（はじめは「勤務外国人官署」あるいはパン〔ポーランドやウクライナなどの貴族を指す〕官署）が創設された⁽⁹⁾。1651年までに、管轄下にある外国人の数は、使節官署の外国人82（84）人と〔外国人官署の〕2312（2302）人であった。すなわち全体としては少なくとも2395人が存在していた。この数字はそれほど大きなものではない。つまり野戦軍の基盤をなす「先祖代々勤務する人々」（首都と地方の貴族）の総数が3万9130（4万124）人であるのに対し、外国人はその6～6.1パーセントであった⁽¹⁰⁾。しかしながら、軍隊組織における地方の騎兵隊が主流の当時、ロシア人貴族と同様に、外国人は主として通常の兵卒たる騎兵であった。すなわち全外国人の12パーセントだけが将校であり、西欧出身者はその4分の1（23.7パーセント）しか占めていなかった⁽¹¹⁾。状況はアレクセイ・ミハイロヴィチによって遂行された軍事改革の後に急激に変化し始めたのである。

ツァーリ、アレクセイ・ミハイロヴィチ治世下における1646～60年代初め、ロシアはいま一度近代化の改革の波を経験した⁽¹²⁾。そしてピョートル時代においても、当時のヨーロッパに存在していた（三十年戦争時に始まった常備軍の形成段階ではあったものの、すでに常備軍があった）手本に倣って軍隊のヨーロッパ化を目指す軍事改革がまたしてもその主要な原動力であった。

I 父と子の軍事改革：共通する特徴

しかし、このアレクセイ・ミハイロヴィチの軍事改革は（本質的には、ピョートルの改革よりも少なからず大規模であった）いまのところあまり知られていないし、その結果も完全には意義を認識されてもいない。改革の共通の成果がすでにA. B. チェルノフによってはるか以前に特質が明らかにされ⁽¹³⁾、ここ2・30年の間で西欧⁽¹⁴⁾とロシア⁽¹⁵⁾の歴史家たちの研究におけるアレクセイ・ミハイロヴィチの軍事改革に関する研究上の重要な進展が芽生え、その基本的な輪郭が明らかになった。それにもかかわらず、歴史学上、いまだその軍事改革を総合する

叙述はなく、統一的な現象として決して完全には把握されていないのである。またそれゆえ、この時代のロシアにおける内政の過程に対する軍事改革の影響を実際に考慮してはいないアレクセイ・ミハイロヴィチ帝についての現代の伝記によってさえ、ほとんど注目されていない⁽¹⁶⁾。

いずれにせよ父と子の軍事改革には多くの共通点があった。

ピョートル時代と同様、アレクセイ・ミハイロヴィチの軍事改革は外交的諸課題の解決によって生じた。17世紀ロシア最初の「大ヨーロッパ戦争」、すなわち1654年にウクライナがロシアへ加入することによって引き起こされた1654～67年の「13年に及ぶ」ロシア＝ポーランド戦争の解決である。この長期にわたる軍事衝突は1656～61年のロシア＝スウェーデン戦争によってさらに複雑なものとなった（活発な戦闘は事実上1656～58年だけである）⁽¹⁷⁾。

アレクセイ・ミハイロヴィチの軍事改革はピョートル改革の規模の面で引けを取らないものであり、またそれは非常に短い期間で遂行された（実際、僅かに10年間である）。新しい陸軍の創設と結びついていたその主要な局面におけるピョートル改革は1699～1711年になされ、アレクセイ・ミハイロヴィチの改革は1649～63年に行われたのである。

ピョートルの改革と同様、アレクセイ・ミハイロヴィチのそれは明確な計画に基づいてなされたものではなく、漸次、軍隊の補充、資金調達そして給与という諸原則の若干の変更を伴った軍隊改革の幾つかの「波」によって遂行された。

改革の最初の準備事業は、1649～50年におけるH. ファン・ブコヴェンによる傭騎兵訓練連隊の創設である。しかし軍隊における重要な変革の第1の波は1652～54年に起こった。それは戦争への準備、およびロシアの中央地帯と一部南部地域における知行（ポメスチエ）システムに基づく新しい軍隊の中核の創設と関係がある⁽¹⁸⁾。第2の波は1657年から60年代初頭にかけてのロシア＝スウェーデン戦争の最中に生じ、その知行構造をロシアの南部、北西部、そして西部に移すことで、「新編制軍」の連隊数は事実上2倍に膨れ上がった⁽¹⁹⁾。それは最初の4つの軍事＝領域管区（「軍管区（ラズリヤード）」⁽²⁰⁾。ベルゴロド、セフスク、ノヴゴロド、およびモレンスクの「軍管区」であるが⁽²¹⁾、H. ミリユコーフはそれらをピョートルの定めた県の先駆けとみなした⁽²²⁾）の形成、および管区を基礎とする「軍管区」連隊（軍隊や軍団と同義）の編制も伴っていた。

ピョートルの軍事改革と同じ様な「波」が生じはしたが、それらはまだ研究が不十分である（少なくとも軍事改革の第1の局面においては二つの波があった。第1の波は1699～1704年である。この時期、「局所的な」戦争の過程で、探求と経験を積む中で新しい軍隊の「中核」が創られた。それを最初に考え出したのはロシア＝スウェーデン戦争であった⁽²³⁾。第2波は1705～11年である。この時期、戦争が大規模で長期化する紛争に変化した後に野戦軍の人数が著しく増加し、また陸軍における軍事改革の基本的な局面が完了した。その結果、1711年にロシア軍における最初の定員および職務規程（ロシア陸軍の「1711年の表」⁽²⁴⁾）が採用され

ることになった。

二つの改革の結果、原理的に新しい大衆的な軍隊が創設された。

第1に、ピョートル治世下における、新兵徴集に基づく正規の歩兵連隊、竜騎兵野戦連隊および守備連隊からなる常備軍の創設である。

第2に、アレクセイ・ミハイロヴィチ時代では、正規の（しかし、恒常的ではなく、軍事遠征後には家々に帰宅させた）「新（あるいは「外国の」）編制」連隊（すなわち備騎兵、竜騎兵および歩兵連隊）が軍隊の基礎をなした。この時以来17世紀末に至るまで、そのような連隊がロシア野戦軍の基本となった。

アレクセイ・ミハイロヴィチの改革の過程で騎兵隊の基礎となったのは、第1に、備騎兵である。防御用甲冑（胸当て鎧と頂が細くなっている兜）を着用し、白兵（刀槍など）以外の火器—騎兵銃とベルトに装着する特別な拳銃ホルダーに入れた一対のピストルーで武装した騎兵である。備騎兵は、一定の規律ある組織として、戦場では将校たちに従って一致団結して行動する、正規の連隊および備騎兵中隊に組織された。第2に、備騎兵を槍兵が補助した。彼らは長い槍で武装して密集隊列による体当たりを加える防御用甲冑を着用した騎兵である。槍兵中隊は備騎兵連隊に入ることもあり、また独立した連隊を編制することもあった。彼らは少人数であり、一種の「備騎兵のエリート」でもあった。第3に、竜騎兵である。彼らは馬に乗る歩兵である。戦場では多様性を持つ兵士として、基本的には徒歩隊形で行動した⁽²⁵⁾。それゆえ竜騎兵連隊における将校の階級システムも歩兵隊で形成されているものと一致している（中隊を指揮するのは、備騎兵連隊におけるような騎兵大尉ではなく、歩兵大尉である）。第4に、兵士はすなわち歩兵である。彼らは兵士の中隊と連隊で編制され、ヨーロッパの操典規定に従って密集隊列を組んで行動した。

アレクセイ・ミハイロヴィチとピョートルの野戦陸軍は、連隊の構造とその員数という面からみてお互いにあまり差異はない。

少なくともアレクセイ・ミハイロヴィチの軍隊には「新編制軍」の騎兵29箇連隊と歩兵38箇連隊があった（しかし「選抜」兵士2箇連隊は、事実上、少なくとも2～3箇の普通科連隊からなる大隊である⁽²⁶⁾）。アストラハンにおける歩兵2箇連隊とシベリアで1660～61年に創設された備騎兵1箇連隊と歩兵1箇連隊を計算に入れると⁽²⁷⁾、騎兵30箇連隊と歩兵41箇連隊があった。「1661～63年の予算」によると、「新編制軍」の全連隊数は、将校2420名を含む総数7万6920名から成る75箇連隊であった⁽²⁸⁾。

ピョートル一世の野戦軍には、1711年の定員および職務規程によると、竜騎兵（騎兵隊）33箇連隊と歩兵42箇連隊があった。すなわち総数8万746人の戦闘を行なう兵卒（非戦闘員の兵卒を含めて10万6278人）および3084人の将校からなる75箇連隊である⁽²⁹⁾。

アレクセイ・ミハイロヴィチの軍事改革の規模およびその後のピョートルの軍事改革に与え

たその影響を過小評価すべきではない。アレクセイ・ミハイロヴィチの軍事改革はピョートルの軍事改革の重要な準備期であった。また時折ピョートルの創造物だとみなされる軍事構造の多くの要素は、ピョートル以前の半世紀前に形作られ、ロシア社会にとってすでに習熟していたのである。

「〔軍隊の〕系統化（レグリャールストヴォ）」、すなわち同様な画一的定員数によるヨーロッパ的基準（軍隊を連隊に、連隊を大隊と中隊に、そして騎兵を騎兵中隊（「シクヴァドロ」）や中隊に分割すること）に倣う軍隊の規則的な組織化を行なうことはまったく新しいことではなかった。

また次のようなことも決して新たなことではなかったのである。第1に、「規律ある」部隊における細分化の実施。第2に、部隊の細分化の訓練。第3に、指揮構成である。O. A. クルバートフが指摘するように、すでにアレクセイ・ミハイロヴィチ時代の連隊では将校位の全人名リストが存在していた（通常、備騎兵連隊および歩兵連隊においては、将校の数は30～33名が基準である）。連隊長である大佐、副連隊長である中佐（「准連隊長」）および少佐（大隊すなわち「准連隊」を指揮する）から大尉や中尉（中隊や小隊を指揮する）に至るまで全人名リストが存在していた。アレクセイ・ミハイロヴィチ時代、ゲネラリテート（将官団）も編制され始めた。すなわち軍隊では將軍という名称が現れ、続く戦争の過程で將軍たちの数が増大した。17世紀における第2の「大きな」戦争である1673～81年のロシア＝トルコ戦争の最中に、ゲネラリテートのいわば「ロシア部」を構成するロシア人將軍たちが現れた⁽³⁰⁾。全体としてロシアの貴族は、こうした将校たちの指揮の下ですでに半世紀にわたって戦い、戦闘での隊列や戦術を訓練した。指揮することが貴族たちにとって習慣的なものとなったのである。

外国人将校たちの指揮も新しいことではなかった。

さらに、「ゼロから」「新編制軍」を創設することは、外国人将校の大量募集を求めることになる。アレクセイ・ミハイロヴィチ時代におけるその雇用の規模は、明らかにピョートル一世時代よりもはるかに大きなものであった。「新編制軍」の組織された将校団は、1651年から1663年までの僅か10年間だけで事実上少なくとも8.5倍に増大し、その数は1651年における外国人官署で管理されたすべての外国人の延べ人数（2312人）よりも若干上回っていた。1663年には連隊長の79.5パーセントが外国人であったのに対し、ロシア人は18パーセントのみであった⁽³¹⁾。この時期、ロシア軍の将校団を構成するのは、ピョートル一世時代よりもはるかに多くの「外国人」であった。おそらく、すでにアレクセイ・ミハイロヴィチ時代には外国人が「新編制軍」連隊の将校団の約半数を占めていたであろう（2400人のうち1000人を下らない）。この傾向は17世紀末に至るまで維持された。しかしピョートル治世下の軍隊における外国人将校の数は3分の1に減少したが（1696年の42パーセントから1721年の12.6パーセントへ）⁽³²⁾、それはロシアにおける民族的将校団の編制を目指すピョートル一世が自覚して

行った工程の結果であった。

ロシアの軍隊における勤務に対する「社会的評価の低さ」、そして将校を軍隊に強制的につなぎ留めておくこと（実際に、時折、何よりも軍事活動の時期にそれは生じた）については認識していたにも関わらず、ロシアでの外国人将校の状況、給与さらには昇進の可能性、以上のことは外国人将校にとって全体的に満足するものであった。それゆえ、将校の大部分、すなわち1650年代から60年代の将校たちはロシアを決して立ち去ろうとはせず、多くの場合ここに留まっていた。またロシアの将校たちと同じように、父から子へと勤務が受け継がれ、上級将校の（何よりも「連隊長」）の職務のステータスをしばしば独占することになる多くの将校の一族を形成した（1699年には133人の連隊長のうちロシア人は僅かに9名であった）。そのような「連隊長の」一族に、たとえばピョートル一世の戦友であるブリュス兄弟（ヤコブ・ヴィリモヴィチとロマン・ヴィリモヴィチ）も属していた。彼らの父は1670年代にロシアの軍隊で連隊長であった⁽³³⁾。

モスクワにある外国人（「新外国人」、「他国人」）^{スロボダ}村〔国税などの義務が免除された集落〕は、1652年におけるその発生期（ポーランドとの戦争の準備前夜および軍事改革の初め）から、商人や手工業者によって普及した外国の文化の中心というよりは、むしろ外国人将校の居住地であった。1665年8月には、その村で彼らは全戸数の69.6パーセント（204戸のうち142戸）を占めていた⁽³⁴⁾。

ロシア人貴族と肩を並べてロシアの連隊で半世紀にわたって勤務した外国人将校は、ロシア社会にとって最も近いヨーロッパ文化とヨーロッパ貴族の社団身分的心理の体现者であった。このヨーロッパ文化とヨーロッパ貴族の社団身分的心理は、連隊勤務者の行動の生きた模範としてロシア社会に影響を与えた（彼らが行った決闘に至るまでそうである⁽³⁵⁾）。また、ピョートル一世自身のヨーロッパ化が、外国人村から、この将校たちの影響で始まったことを忘れるべきではない（彼らは、ピョートルが自分のものとした痛飲や粗野な気晴らしを行なっているため、最高の文化的基準を決して体现するものではなかった。また「大使節団」当時、外国では彼らの否定的な側面が「高貴な大物たちを」敬遠させたのである）。しかし、アレクセイ・ミハイロヴィチ時代およびピョートルに至るまで、多数のロシアの貴顕たちはすでに外国人村を訪れていたし、その指揮下で戦った外国人将校と友好的な関係を結んでいたのである。かくして、たとえばゴードン〔パトリック、1635～99〕の友人である連隊長のポール・メネジスと大商人で企業家のピーター・マルセリス〔1602～72〕の寡婦との1677年2月の結婚式には「ゴリーツィン家の人々と若きドルゴルーキー」が参列していた⁽³⁶⁾（おそらく、B. B. と B. A. のゴリーツィン公、および当時の政府のリーダーの一人で有名な将軍 I. O. A. ドルゴルーキー公の息子である M. I. O. ドルゴルーキー公がいたであろう）。

将校たちの年少の子弟に将校の位を与えるという行動さえ新しいことではなかった。18世

紀のロシア貴族の経歴によって、この行動は私たちに良く知られている。すでに1677～78年、時には10歳にさえ達していない自分の子供に、外国人将校たちはそれを実践していた⁽³⁷⁾。1677年、こうした「未成年者の将校」の中に、1709年のポルタヴァ戦におけるピョートルの防衛陣には将来の英雄となる人物もいた。当時〔1677年〕、アレクセイ・ステパノヴィチ・ケレン（ケリン）〔1672～1715〕は年少の少尉補であった⁽³⁸⁾。

新しい軍隊の建設は、ピョートル時代と同様に、大掛かりなものであった。すなわち、1650年代～60年代のアレクセイ・ミハイロヴィチ政府は、ピョートル政府に劣らず、それと同様のメカニズム（ある種国庫の「全権委任者」として行動する、信用できる外国人商人）を通して外国での武器買い付けを行なった。たとえば1661年だけでも、英国人ジョン・ゲブドンはツァーリの依頼を受けて、アルハンゲリスク港を經由して、傭騎兵連隊のために1万丁のマスケット銃、5百丁の騎兵銃、および拳銃ホルダー付き5百組のピストルを調達することを計画したのである⁽³⁹⁾。

新たな技術の製品を広く受け入れることも新しいことではなかった。ツァーリ、アレクセイ・ミハイロヴィチは些細なことでさえ自分の息子に似ていた。1659年4月、デンマーク公使の秘書官アンドレイ・ロデが証言しているように、ツァーリは大砲の新しいモデルを試すことに積極的に携わった。さらに彼自身はそれらのうちの幾つかを作ることに署名した（砲術家で連隊長であるデンマーク人ニクラス・バウマンはロデに、自身によって工夫された火砲の試射に参加した「大君自身が工夫した〔原文強調〕大砲の設計図」を示した⁽⁴⁰⁾）。

17世紀ロシアの大砲に関する現代の研究者たち（何よりも最も影響力の大きい専門家であるA. H. ロビン）が見做しているように、アレクセイ・ミハイロヴィチ時代、結局のところ、大砲の口径の規格化と野戦軍の同型武器の導入を伴う大砲の重要な改革も行われた。ただ野戦火砲の口径は3フント〔1フント＝409.5グラム〕ではなく2フントの砲弾を発射させるものであった⁽⁴¹⁾。

従って、ピョートル一世は自らの軍事改革を決して「白紙から」始めたわけではなかったのである。1717年、元老院議員Я. Ф. ドルゴルーコフ公も彼にそのことを認識させている。「(前略) 軍事上の諸問題です。陛下の父君はそれらを通して多くの称賛を受けました。また偉大な国家のために利益をもたらしました。常備軍の創設によって陛下に道をお示しになりました。このことによってその制度全体の愚かしいものが破壊されました。(後略)」⁽⁴²⁾。Я. Ф. ドルゴルーコフは、Б. П. シェレメーチエフと同様に、1680年代～90年代、アレクセイ・ミハイロヴィチによって創設された軍事システムのなかで軍司令官を擁する「軍管区」連隊を指揮することから自らの軍事的経歴を始めている。1697～98年には、ベルゴロド軍管区の責任者、すなわちベルゴロド軍管区連隊の司令官にしてドニエプロフスク軍の司令官となった⁽⁴³⁾。それゆえ何を語っているかを良く知っていた。ピョートルの軍事改革は、軍事組織の観点からすると、

多くの点で彼の父の軍事改革によって準備されていた。軍事勤務の新しい原則はアレクセイ・ミハイロヴィチの改革の中にその深い根源を持っていたのである。

II アレクセイ・ミハイロヴィチとピョートルの軍事改革：その特殊性

しかしながら、二つの改革の間にはロシア社会に深く影響を及ぼす極めて重大な原理上の幾つかの差異も存在した。

多くの点で、重大な原理上の差異は、そのスタートの構え—その情況と条件—によって生じさせられたものである。それらの構えで、改革が行われた当時存在していた社会的、財政的そして国家的な制度や構造を伴った改革の複雑な相互作用によって、極めて重大な原理上の差異は広がった。

しかし構造は本質的に異なるものであった。

アレクセイ・ミハイロヴィチの軍事改革は17世紀中葉に開始された。当時、軍隊は、まず何よりも、土地の保障・供給という基礎の上に形成された。すなわち16世紀中葉に形成されて1世紀にわたって本質的な変化なく存在してきた知行システムを基盤に、軍隊は形成されたのである。領域内の軍事的人員の動員システムである。軍事的人員は、軍事遠征時には必需品すべて、すなわち馬、武器、甲冑および食糧を自給するという条件で暮らしていた。野戦軍の基本は領地・封地騎兵隊、すなわち騎兵隊である。その騎兵たちは君主から下賜された土地、つまり軍事的義務が果たせない場合には没収することができる国有の知行を有しながら自らを給養した。政府は知行からの収入の不足を理解しており、良く知られているように、軍事遠征にあたっては軍務にとって必要なものを支度することができるように、それを不定期な金銭による下賜で補った。この土地と金銭の下賜（知行と金銭給与）の基準が存在した。また軍務に対する主要な奨励と出世の昇降段がこれらの給与の上昇であった。その給与の額の大きさが社会的ステータスおよび明確なひとつの社会グループに帰属しているという指標である⁽⁴⁴⁾。

軍事組織は、そこに基礎を持ち、またそこから離れた社会的構造をも多くの点で規定するほどロシア社会にとって重要であった。

おそらくこの時点で、ロシア社会の身分構造について語ることはあまり公平ではないであろう。実際、その時のロシア社会は大規模な身分集団というよりも、ヒエラルヒー的に並べられた身分的グループの複雑な寄せ集めであった。その軍事化した一部分は、幾つかの軍事＝領域的な社団に編制された。第1に、エリート的な首都の社団（「モスクワの官僚たち」）、第2に、地方貴族の社団である（現在、歴史家たちは、前者を「君主の宮廷」、そして後者を「勤務「都市」」と呼んでいる）。社会は、自らを何よりも細分化され、複雑な一体物であると感じていた。その中で、これらのグループ（そのステータスは「官位（чин）」という概念で表現されている）は、全ロシアの諸身分への融合が少しも完了していなかったのである⁽⁴⁵⁾。

この社会的構造を近代化し、それをわれわれが慣れ親しんでいる身分的カテゴリーとして提示しようとする19～20世紀の歴史家たちの試みは、一連の歴史学上の人為的な構成の創造へと導くことになる。すなわちロシア社会の典型的人間を以下のように区分することになった。第1に、「先祖代々勤務する人々」（自由かそうでないかは別として、後の「貴族（дворянство）」と同一視される人々、つまり経済的な基準に従って区分された土地と農奴農民を相続所有している人々）である。第2に、「装備により勤務する人々（приборные）」である。彼らは、より低い社会的グループの人間として軍事勤務を担う人々であり、彼らに下賜された土地や給与を得るために勤務する雇い人を所有する個人的相続の権利を持たない人々である⁽⁴⁶⁾。

とはいえ17世紀政府および上記のような典型的人間自身も、自らをそのように称することはなかったし、同様のカテゴリーの中に入れて社会を理解してもいなかった。彼らは社会をヒエラルヒー的に並べて相互に補完しあい、「官位保有」グループおよび彼らと関連を持つ軍事＝領域的社団（勤務「都市」）の細分されたもののまとまりであると感じていた。すなわちお互い切り離された「官位保有者」のある種の「シンフォニー」のようなものとして社会を感じていたのである。そうした人々のヒエラルヒーは様々な手段（すなわち彼らの「名誉」の格付けと「門地制度」のメカニズムを通して）によって遵守され支えられねばならなかった。こうした理解のシステムでは、身分に共通する「貴族」としての単一性という認識、さらにはその単一性の将来にわたる基準（たとえば、土地や農奴の所有、富裕さの一定の基準）は甚だ不十分であった⁽⁴⁷⁾（「先祖代々勤務する人々の」低い層である「小貴族（дети боярские）」は、しばしば農民を持たないか、あるいはせいぜい2・3戸を所有するだけだった）。大体において、「先祖代々勤務する人々」は軍事的諸義務である共通の「連隊」勤務（野戦軍勤務）で結合されていた。

こうした社会的グループによるあれこれの方法で自らの立場を守ることが、君主に彼らを重視させ、客観的には君主の権力を制限することになった。それは、はじめは全国会議の制度を通してだったが⁽⁴⁸⁾、その全国会議の消滅とともに、17世紀中葉から後半に良く見られる「官位保有者」あるいは軍事＝領域的社団の集団的嘆願を通してであった⁽⁴⁹⁾。

それゆえ、アレクセイ・ミハイロヴィチは軍事改革の過程でまだ社会構造の断固たる破壊という手段に訴えることはできなかった。その時点では、社会構造はまだ十分不可欠で保守的なものであった。社会では、「官位保有者のシンフォニー」や彼らは諸義務をもつという社会全体を貫く伝統的な心理が強かった。結局のところ、ツァーリ自身もそうした心理を共有したのである⁽⁵⁰⁾。

国家構造も、軍事的組織におけるきわめて重要な変更への準備はなかった（国家の財政、租税および行政のシステムは、新たな軍隊の給養という重荷を背負うことができず、また伝統的

な土地の保障・供給を拒否することもできなかった)⁽⁵¹⁾。

Ⅲ 移行タイプの改革としてのアレクセイ・ミハイロヴィチの改革

それゆえアレクセイ・ミハイロヴィチの時代には移行タイプの軍事改革のみが可能であった。すなわち、知行（ポメスチエ）システムの基礎を維持して古い原則と新しい原則を混ぜ合わせた「ハイブリッド」な軍事機構、およびその知行システムに基づいて混合した社会構造の創設である。それらはまた社会的心理にも制約されていた。

アレクセイ・ミハイロヴィチは、「古い革袋に新しいぶどう酒を流し込まざる」をえなかった。実際、彼はそのようしたのである。

ツァーリはその中に実際に二つのパラレルな軍事構造が存在する「混合した」軍事組織を創設した。第1は、古い「知行（ポメスチエ）」の軍隊である。これは徐々に数の上でも規模の上でも減少し、軍事的意義も喪失していった。第2は、「新編制軍」の連隊に基礎を置く新たな軍隊である。それは徐々に、野戦軍のなかで基本的攻撃力を持つ兵力へと変化した。しかしながらその野戦軍は主に知行システムの伝統と原理に基礎を置いたものである。

従来通り、知行の騎兵隊がこの軍隊のエリートと見做された。いまやこの騎兵隊が、社会のエリートおよび権力の支柱として、何よりも首都の貴族（столичное дворянство）の運命を担うことになった。この貴族層に手をかけることは何にもまして厄介であった。首都貴族の社団（すなわち「君主の宮廷（Государев двор）」）は、以前の百人隊長の勤務を遂行し、「モスクワの官位保有者たち」からなる「百人隊（сотня）」は軍司令官の率いる連隊の全名簿の先頭に立つことになった⁽⁵²⁾。事実上、首都貴族の社団は、17世紀末に至るまで軍事改革を被らなかつた。そしてピョートルの軍事改革の末期でさえ勤務の伝統的な基盤を部分的に維持していた（1711～13年においてさえ、「ツァーリの宮廷の人々」はロシア＝トルコ戦争の好機に伝統的な知行の騎士として軍務に動員され⁽⁵³⁾、1711年にはその戦場にこの社会層から5266人を動員することが計画された⁽⁵⁴⁾）。地方貴族（勤務「都市」）のなかで財産を有する最上層は、「百人隊」の勤務を果たし続けながら、勤務の伝統的な基盤に付け加えられた。

しかし、地方貴族の基本的部分には「新編制軍」連隊、傭騎兵連隊さらには歩兵連隊に置き換えられた（知行システムの中に生きる人たちの伝統的心理という観点からすると、名誉のない、すなわち「史料の上では」「あまり名誉のない」勤務に就かされた）。ロシア＝ポーランド戦争へ向けた準備をする中で軍隊の中核を創設する際、アレクセイ・ミハイロヴィチは次のようなコースをたどることになった。1653年の貴族の未成年者の審査をツァーリ自身が行う過程で、彼らの3分の1以上（35.5パーセント）が歩兵連隊所属とされた（古い、中央の「モスクワの向こうの（замосковные）」諸都市には30パーセントが所属した⁽⁵⁵⁾）。報償として、彼らには勤務「都市」内部での伝統的な「官位保有者」への昇進および「モスクワの名簿」への登録さ

え約束された。その一部は実行されたが、しかしこれは勤務の基礎および「官位保有者」のヒエラルヒーについて堅持してきた認識を破壊することになる。また兵士の勤務（とくに御料地農民や「装備により勤務する人々」を大掛かりに歩兵連隊に募集し始めた改革の第2段階から）は、従来通り「名誉」を踏みにじるものとして理解されたのである⁽⁵⁶⁾。

正式な軍事ヒエラルヒーの上で、歩兵連隊が「装備により勤務する人々」から構成されたモスクワの銃士兵連隊よりも低い地位にあることはなおさら不健全であった。

軍事史家たちは、通常、改革の新しく近代化された局面を重要視している。しかし改革には非常に強く逆行する傾向もあった。伝統的な軍事構造の一層の強化である。それは伝統的な歩兵であるモスクワ銃士兵軍団の維持と拡大に現れていた。彼らは「新編制軍」の歩兵連隊ではなく、陸軍の歩兵のエリートとは見做されていなかった（そしてより重要なことには、実際にそうであったのだ）。彼らは極めて高度に訓練され、社団的な連帯によって緊密に結び付けられていた。17世紀の様々な戦争で、彼らはロシア歩兵の基本的な攻撃兵力であった。改革の過程で、アレクセイ・ミハイロヴィチはその数をほぼ2倍にした（1651年から63年までに、モスクワ銃士兵の数は銃士兵18箇連隊8030人から、24箇連隊1万5878人へと増加し⁽⁵⁷⁾、1677～81年までには2万人を超えていた⁽⁵⁸⁾）。しかし、われわれが見るように、それは連隊の数の増加というよりは、連隊の構成人員数を2倍にすることによって成し遂げられたものである。そのことは、モスクワ住民における銃士兵の割合の著しい増大をもたらし、1650年代の末からは、自らの利益を守りながら統治エリート・グループによる政治ゲームで利用されつつ、国内政治の紛争に決定的な形で介入するほどの能力のある、首都での重要な軍事のおよび社会的な勢力へと変化させることになった。

伝統の踏襲という方向には、軍事＝領域的社団である勤務「都市」としての基盤の維持という側面もあった。社団の完全性を破壊することになった大部分の地方貴族の「新編制軍」への移行にもかかわらず、アレクセイ・ミハイロヴィチは地方貴族を支えるメカニズムである知行と金銭的給与によるシステム、「都市」の選抜された代表者たちである「知行や給与を定める人々（окладчики）」の制度を維持した。この都市の代表者たちは勤務形態別の給与の規定および審査による選別を行なった。すべてのこれらの伝統的要素は1702～03年の北方戦争初期においてさえ維持された⁽⁵⁹⁾。かくして、たとえ緩和された形ではあったものの、地方「貴族の」社団化の基礎が勤務「都市」では保たれていたのである。

さらにいま一つ確かな伝統が受け継がれていた。すなわち伝統的軍事エリートの優位である。実際、改革期の軍隊においては二つの並存しつつも対照的な指揮ヒエラルヒーが存在していた。第1は、ロシアのアリстокラートとして上位の指揮構成員を抱える古い「軍管区軍司令官的（разрядная воеводская）」ヒエラルヒーである⁽⁶⁰⁾。第2は、「新編制軍」の連隊と結びついた新しい（將軍や連隊長）ヒエラルヒーである。軍隊のなかで「新編制軍」が数的に優勢であった

にもかかわらず、その指揮ヒエラルヒーは、「軍司令官的」ヒエラルヒーと比較すると、副次的で従属的立場に置かれ、自律的な役割を果たしてはいなかった。「新編制軍」の連隊の低い地位、および外国人に比べてロシア人将校たちが「知行」によって勤務せざるを得ない程一層低い給与の受領⁽⁶¹⁾、以上のことが民族的〔ロシア人〕将校団を形成する上で妨げとなった。つまり首都のエリートのみならず、地方貴族の上層さえも将校になろうとはしなかったのである⁽⁶²⁾。そのことによって、17世紀末までに、「参謀本部付将校」の等級では外国人将校が完全に優位を占めることになった⁽⁶³⁾。実際、17世紀においては〔ロシア人による〕民族的将校団の創設はうまくいかなかった。アレクセイ・ミハイロヴィチは1650年代にその基礎を置き、1670年代には軍隊のなかでそれは顕著な位置を示し始めた。しかしもはや1680年代には、30年間にわたって勤務したロシア人将校の第1世代は、必要な補充や入れ替えもないまま表舞台から退いていったのである。

また新軍の財政問題も解決することはできなかった。重要な税制改革と行政改革を行わずに国家の会計で新軍に資金を供給しようとする試みは貨幣改革を失敗に終わらせることになった(1654年以降、価値の下落した銅貨の発行を行なったのである)。最初の5～6年は「銅貨インフレ」のおかげで財政を賄うことができたが、1660～61年には逆効果となった。すなわち銅貨の急激な価値の下落が始まり、実質の給与額が減少した。これが原因となって軍隊には不満が生じ、またそのことがこの時代の軍事的敗北の理由の一つとなったのである⁽⁶⁴⁾。

1663年に銀貨の流通が復活したことは、国家にこの軍隊を維持するための資金（「新編制軍」連隊だけで77万5000ルーブルが必要であった）が十分にはなかったことを示している。そのため国家は給与の払い残しをせざるを得ず、多くの点で（知行によって勤務を保証する）土地供給を基盤とするシステムによって軍を扶養することに戻ることを余儀なくされたのである。また住民から追加臨時税として（穀物徴集）税を徴収し、部分的に現物支給をせざるを得なかった。そのことは、キャロル・スティーヴン・バルキンが示しているように、まさに1663年から積極的に導入された⁽⁶⁵⁾。したがって知行システムの基礎を断ち切ることはできなかったのである。

IV アレクセイ・ミハイロヴィチの軍事改革のロシア社会およびその社会構造への影響

すべてのこうした問題の解決が必要であり、加えて知行システムの基盤を維持したにもかかわらず、改革はその基盤を根底から浸蝕しつつ、そうした基盤を徹底的に動揺させることになった。

新しい軍事構造は、これまでの勤務原則を基に形成された古い「官位保有者」のシステムと明らかに矛盾するものだった。このことをすべての社会グループが感じとることになる。

また新しい軍事構造は様々な連隊や勤務形態によって細分され散在していた軍事＝領域的社団の破壊をもたらした。

幾つかの「都市」（ときには5～7都市かそれ以上）の代表者からなる連隊における合同勤務は、次第に「領域的な」心理を破壊し、身分に共通する心理の形成を促した。

以上のこと以外に、軍事改革は社会の上層における階層分化の激化、および社会の垂直的可動性におけるメカニズム機能を強化した。それは次の通りである。

第1に、一方では、軍事改革は上昇志向、すなわち改革の否定的帰結（新編制軍連隊への転換）を回避したいという地方貴族上層の志向を強めた。またこの改革は、そうした上層の「モスクワの官位保有者」（改革によってもほとんど動揺を受けない「君主の宮廷」）へのある種の「逃亡」を引き起こした。V・キーヴェルソンの観察によると、まさに1660年代から始めながら、彼女によって研究されている勤務「都市」におけるモスクワの官位保有者の割合は急速に増大している。すなわち、1641～60年にはこの割合は全部で3.6パーセントであったが、1661～80年には21パーセント、1681～90年にはすでに47.9パーセントとなった⁽⁶⁶⁾。首都の貴族社団（「君主の宮廷」）の数はまさしく1660年代初めから急激に伸び始めた。П. В. セドーフは次のように指摘する。「大貴族の名簿（*боярский список*）のなかの勤務人（すなわち在府官を除いた君主の宮廷）の総数は、1667年の1656人から1681年の4177人に、すなわち252.23パーセントにまで伸びた。15年間で2.5倍以上もモスクワの官位保有者の総数が増加したのは、〔われわれの区分によると—ニコライ・ペトルヒンツェフ〕君主の宮廷の歴史全体のなかで先例のないことであった」⁽⁶⁷⁾。1680年代初頭までに君主の宮廷の総数がモスクワの官位保有者の約半数を占める在府官を含めて7000人以上に達した⁽⁶⁸⁾。そして半世紀の間に実際に2.5倍に増大したのである。すなわち1650年の3900人から⁽⁶⁹⁾、ピョートル治世の18世紀初頭には1万1000人に達したのである⁽⁷⁰⁾。

第2に、他方で、軍事改革は先祖代々勤務する「下層」、とくに傭騎兵と歩兵における地方の「小貴族」といった人々の社会的な零落をもたらしたのである。改革の開始時点の1651年で、その数が「モスクワの官位保有者」を含めて3万9100～4万100人を越えない「先祖代々勤務する人々」にのみ依拠して、もっぱら「新編制軍」だけの連隊で8万人にも上る大軍隊を創設することは不可能であった⁽⁷¹⁾。このことは、最低限の知行給与の範囲内での土地分与およびその知行給与の一部さえ伴って、「装備により勤務する人々」や農民さえも「小貴族」（何よりもロシアの南部と南東部の国境における）にすることによってこの連隊に少なからず大量に動員されることになった。「農民を所有しない人々（*бескрестьянные*）」および自らの労働で土地を耕すような人々は典型的な「農民所有者である知行領主」とはなり得なかったし、ますます彼らの出身であるより低い社会グループの側へと漸進的に移行していった。彼らの社会的地位はさらに下落した。結局のところ、南部では、17世紀の末までに彼らは歴史家たちによっ

て「屋敷持ち農民（郷士）（однодворец）」という名称を持つことになる担税民のカテゴリーに変化していくことになるのである。

社会的地位を失ったグループと距離を保とうとする志向、および軍事＝領域的団体の漸次的な崩壊は、「先祖代々勤務する人々」の上層部をより一枚岩的な身分に団結させる契機となる。彼らはピョートル時代には「貴族（шляхетство）（その後 дворянство）」と呼ばれるようになったのである。

この貴族は、まず何よりも増加しつつある「君主の宮廷」を中心に、自らの軍事勤務の義務を基礎にというよりも、農奴（領主農民）のいる領地の所有という経済的基盤の上に形成された（18世紀初頭、農奴所有の家43万6000戸のうち25万4000戸、すなわち58.3パーセントが「モスクワの官位保有者」であった）⁽⁷²⁾。それと並んで、中央諸郡の勤務「都市」においてさえ、農民を持たない「先祖代々勤務する人々」の割合が大幅に増大していた（20～30パーセント）⁽⁷³⁾。農民と水呑百姓（бобыльские）の世帯の所有者のみを「貴族」とみなすЯ.Е. ヴォダルスキーは、1700年における貴族の数を2万2000～2万3000人（領地の数は2万8500）であったとしている⁽⁷⁴⁾。すなわち「1651年の予算」による「先祖代々勤務する人々」の層より半分ほど少ないのである。そのことは、低い層の出身者、そしてさらには1650年代～70年代におけるアレクセイ・ミハイロヴィチの軍事改革の結果、この層を補充した「新入り（новички）」である新たな身分との区別についてはっきりと証明するものとなった。新しい身分は特権をもつ「高貴な」身分としてヨーロッパの貴族的精神を次第に獲得していくことになるのである（一部は彼らと一緒に勤務した外国人将校を通じて、そしてまた西欧から入ってきたテキストやマナーを通じて）。「官位保有者」の間のきわめて厳密な区別はそうした身分には必要ないものであったが、1682年には区分を支えていた門地制度が廃止されることになった。そのことは貴族の団結を疑いもなく容易にしたのである。

新しい身分は知行システムの維持をもますます必要としなくなった。この身分は、まず何よりもロシアの中央地域を基盤に形成された。そこでは知行の分与のための土地の蓄えをずっと以前から使い果たしていたのである。しかし、南部地域では土地の蓄えがあり、さらには土地の肥沃度が極めて高く、1637年以来法的に明確にされた一連の「保護都市（заказные города）」を含む知行システムは、土地の備蓄を手放してはいなかった⁽⁷⁵⁾。保護都市における「モスクワの官位保有者」には、土地を獲得することが禁じられた。「新編制軍」の連隊の基礎をなし、社会的に保護されていない「勤務メルコタ（身分の低い勤務人）」による土地所有を掘り崩さないようにするためである。

知行システムにおける土地資源はすでに使いきっていた。褒章としての知行の土地と給与への「補給」は、2回のロシア＝トルコ戦争時（1673～81年と1686～1700年）には非常にしばしば行われていたが⁽⁷⁶⁾、それらはすべて虚構となった。すなわち実際の土地ではなく地位

の形式的な指標となり、土地の給与と実際の中身の差は大きなものとなったのである。形成されつつある身分は、勤務の成果としての知行の分与というよりも（なぜならそれらは殆どなかったから）、他の仕組み（購入、交換、およびその他）を通じて現実的な土地の取得に興味を持つようになった。そのために何よりも象徴的な知行所有地である土地を財産にすることへと変えたのである。この現れの一つが（国家による知行の一部を「世襲領地」に売却する方法、知行の非等価交換、などを通して）知行を世襲領地に変える顕著な傾向であった⁽⁷⁷⁾。

このように、知行システムは軍事構造の維持の保障をしなくなった。なぜなら、知行分与のための土地の蓄えがなく、そのためにこのシステムが新たな知行の分与によってほとんど補強されなかったからである。人口が増加するとともに、貴族の知行の細分が生じた。そして、その知行の規模の小ささは、毎年の軍事遠征参加にかかる膨大な支出を必要とする長引く戦争の際には、軍隊の必要物資を供給することもできず、また先祖代々勤務する人々の最も「弱い」グループを経済的に疲弊させることになったのである⁽⁷⁸⁾。

V ピョートル一世の治世初頭における 17 世紀の軍事システムの危機

当然のことながら、すべてのこれらの問題は、「ハイブリッド」の軍事構造が半世紀存在した最後に何よりも先鋭的に顕在化し始め、ピョートル一世の治世初期に最高潮に達した。ピョートルが、果たして根本的にこの「ハイブリッド」な軍隊を真剣に改革しようと思っていたかどかは疑わしいが、彼は父と兄から継承したその軍隊とともに引き継いだ 1686～1700 年のロシア＝トルコ戦争を開始することになる。

しかし、戦争はこの「ハイブリッド」な軍隊がもついまひとつの弱点を露呈した。この軍隊は比較的「短期的」でしかも「近場」の戦争では十分効果的だが、1686～1700 年の戦争（戦争期間の長さでいえばロシア＝ポーランド戦争を凌駕していた）のような、戦場が遠隔地での長期戦ですぐに蓄えを使い果たしてしまった。常備連隊（銃兵連隊を除いて）が欠如しているなかで、残りの連隊を季節ごとに動員することは、徴集場所に来ること、および春と秋の〔泥濘期の〕悪路の通行が困難なはなはだ不都合な時期に家に帰還させるためだけでも膨大な費用が必要だった。また少なくとも半年勤務に就かねばならず、また戦場のそばで直接食料を購入することが極めて困難な「何もない」ステップでの戦争では膨大な費用が必要だったのである⁽⁷⁹⁾。1698 年の銃兵隊蜂起の後に大使節（Великое посольство）が帰国すると、モスクワの銃兵隊を壊滅したことによってこの問題は一層深刻なものとなった。交換する必要があったロシアの歩兵を編制する重要な要素が欠落してしまったのである。以上のようなことは、たとえこれらの不足を取り除いたとしても、定員の補充と供給の新しい原則を有する新たな軍隊を組織する要求を呼び起こすことになった。

VI ピョートル一世の軍事改革の特質とロシア社会への影響

ピョートルは、最終的にこのような軍隊を次の1700～21年の「大ヨーロッパ」北方戦争の第1段階で作り上げた。

ピョートルの軍事改革とアレクセイ・ミハイロヴィチの第一番目のそして最も根本的な違いは、ピョートルが知行システムを放棄したことである。このシステムは、大規模軍隊を創設するという課題には有効に機能しなくなった軍隊の維持と編制を行なう基盤の可能性を事実上喪失させたのである。

知行システムの放棄は、1698年の秋の大使節からツァーリが帰国してすぐに実際に始まった。第1に、すでに1698年にはモスクワ銃兵隊が解体させられた。第2に、1699年11月には軍隊の定員充足という新たな原則への移行が始まったのである（ピョートル自身の言葉によると、「それらに代わって、緊急の常備軍の徴集が始まった」⁽⁸⁰⁾）。

まず初めに、1699年から1703年にピョートルは、「自由民（вольница）」および耕作に従事しないホロープによる志願（義勇）の原則に基づいて軍隊の編制を行なうヨーロッパ的原理を利用しようとした⁽⁸¹⁾。しかし自由な住民グループがほとんどいないロシアの環境では、「自由民」の補給源は瞬く間に枯渇した。1702～03年、すでに「自由民」の「空回りした」募集は、歩兵連隊へ担税民から「徴集された兵卒」で補われた。1704～05年の新しい連隊の創設および軍隊の人数の増加によって始まる軍事改革の第二段階では、ピョートルにとって、最終的な新兵徴募システム、つまり担税民（主として農民）から新歩兵連隊の兵卒構成員を編制するシステムに移行する以外の道は残されていなかったのである⁽⁸²⁾。

この方法によりただちに大規模軍隊の問題が解決したが、別の問題が生まれた。いまや軍隊を国家がその予算の負担によって資金を供給しなければならなかったのである。

最初、アレクセイ・ミハイロヴィチ時代と同じように、この問題は一時しのぎの方策によって解決が図られた。第1に、これまでの治世で蓄積されていた金銭的財源を利用すること。第2に、住民から徴収する一連の特別税を導入すること（「竜騎兵鞍税」に至るまで）。第3に、ルーブリ銀貨の平価切り下げを利用して国庫の収入を図ること。これはアレクセイ・ミハイロヴィチの時代と同じように、切り下げ後5～6年で大幅なインフレーションと給与の部分的価値の下落を生じさせ⁽⁸³⁾、さらには軍隊維持費の増大や国家予算の赤字への移行などがポルタワの戦いに勝利した1709年に顕著にみられるようになった（1709年8月5日、B. П. シェレメーチェフはツァーリに次のように書いている。「将校も兵士も給与は甚だ少額で、6月にはその給与さえも全額で受け取ることはなく、それが7月とこの8月にはまったくなくなりました。受け取る場所に居なかった幾つかの連隊は何か月にもわたって受け取っていないのです」⁽⁸⁴⁾。財政当局を指揮していた「利得者」〔地方住民にさまざまな税金を課すことによって国家を豊

かにすることを義務付けられた中央から派遣された官僚。徴税人という意味もある]の A. П. クルパートフは、「財務当局には」お金がないという病気の床にあったピョートルの手紙に対する返答として、ツァーリに答えている。市会にもお金がない。しかし命令により、「多くの千人隊は市会税を送ってこないのです」⁽⁸⁵⁾。

これは、必ずしもいつもうまく進んでいるわけではないピョートルの行政改革と税制改革の第二段階にとって強力な刺激となった。すなわち、ピョートルは 1709～11 年に統治と財政システムの脱中央集権化から始めた。そして 1711 年の初頭にかけて設立した県に、軍隊の維持と資金供給を負わせようと試みた（事実上、これらの県は軍隊維持のための軍事＝財政領域管区として考えられた）。しかし数年後には、統治、財政および税制のシステムの中央集権化に戻らざるをえなくなった。ピョートル一世は、治世の終盤である 1717～24 年に、より大規模で統制された一連の改革を行なうことになる。このように、軍隊の国家による財政負担という決断力のある移行が、アレクセイ・ミハイロヴィチ時代よりももっと根本的な行政・財政改革が行われた理由だった。アレクセイ・ミハイロヴィチはそのような規模で改革を行う必要はなかったのである。

実際には住民の〔支払う〕軍事費の増加は小さかった。リチャード・ヘリーはある論文で 17 世紀後半における軍事費を計算し、すでに 1650 年代には 300 万ルーブリ以上（315 万 6000～353 万 7000 ルーブリ）だったと結論付けている⁽⁸⁶⁾。平価切下げ時のルーブリ価格の下落を考慮すると、陸軍に対するピョートルの支出額（1720 年には 400 万ルーブリ）にほぼ相当する。17 世紀末の軍隊は人員においても構造においてもピョートルの軍隊に実際には劣っていなかったとすると、そのような結論はかなり真実に近い（他の分野では、ヘリーの計算は過大に見積もられているようだ）。

ピョートル時代には別のことが起きていた。つまり住民と国家予算の間で軍事費用が再配分されていたのである。以前は住民のかなりの部分が軍事費（一部もしくは全部）を兵士として直接自己負担していたが、いまやこの軍事＝身分的グループは、多くの点でこれらの費用の支出から解放された。浮いた資金は国家の税金に振り向けられた、その結果、全体として、陸軍の軍事費の穏やかな増加のもとでも、課税額が急激に増えることになった。

しかし、以上のことはこのような状況においてすでに無用となった軍事＝身分的グループの存在の必要性和妥当性が問題になった。

軍隊構造の新しい原則への移行は、ロシアの社会構造および社会＝経済構造により大きな影響を与えたのである。

軍事化された身分グループをもとに組織された軍事＝身分的グループの古い組織は、簡単に言えば必要ではなくなった。このことは、それに基礎をおいた社会構造の存在もその必要性が疑われるようになったということである。

1699～1711 年の軍事改革の主要な段階プロセスにおいて、古い社会構造の決定的な破壊が

始まった。つまり不必要な古い軍事=身分グループ、およびそれを支えていた制度と精神を有した「モスクワの官位保有者」のシステム全体の破壊である。次々と「装備により勤務する人々」のグループ（モスクワと諸都市の銃兵隊、諸都市のカザークなど）および「先祖代々勤務する人々（大貴族、大膳職〔大貴族につぐ宮中の高官〕、モスクワの貴族と在府官、そして選抜された地方都市の貴族と小貴族）、このような人たちは新しい軍事システムのもとでは必要がなく、他の社会構造の別の（非軍事）部分における以前の「官位保有者のシンフォニー」の残滓ともども一掃された（ゴスチ、ゴスチ組合、ラシヤ組合、ポサード住民のうちの「下層の庶民」などの人たちであるが、彼らは徐々に区別されて都市身分のなかの商業を営む人々からなる相対的に統一的な都市身分としての「商人（купечество）」へと一体化し始めた。この用語は17世紀の社会用語には存在しなかったものである）。

以上のようなグループの消滅は、身分上の「官位保有者」という寄せ集めにおける「内部障壁」の最終的な崩壊をもたらし、17世紀の軍事改革の過程で始まった「先祖代々勤務する人々」の上層部の団結を強化し、さらにはそれらを基盤として統一身分の形成を促進することになった。この統一身分は、1711年までに、ポーランド語から借用した「貴族（шляхетство）」という用語によって自らを定義し始め、ピョートルの改革の最後には皇帝自身の影響のもと「貴族（дворянство）」という用語を初めて自ら使用するようになった⁽⁸⁷⁾。

この身分は、新たな基盤、すなわち共通の軍事=身分的義務の基盤というよりは、むしろ農民のいる所領を領有する経済的基盤の上に形成された⁽⁸⁸⁾。国有地農民のレベルにまで落ちた（ロシアの南部の「小貴族」のように）こうした基準に合致しない「下層グループ」が、この身分から最終的に切り離されて排除されることになった。貴族は、他の社会グループからますます決定的に自らを区別する、特権を持って西欧化された身分に変わり始めたのである。

ピョートルは抜本的にこの身分的結束の経済的基礎を固めた。ピョートルはアレクセイ・ミハイロヴィチの「ハイブリッド」な古い軍隊だけでなく、その基盤によってかなり前から「空回りし始めていた」知行システムそのものを徹底的に破壊した。このシステムを国家は物資の上で維持することができなくなっていたのである。「父祖伝来の、勤務して得た、そして購入した相続地および知行地」を統合して「不動産である領地」とする「一子相続制について」という1714年3月23日の有名な布告のなかに見える勢いの良い〔ピョートル一世の〕署名と数行の文言によって（第1項）⁽⁸⁹⁾、新しい身分に法的に国家のものとなっていた土地を何百万ヘクタールも与えることで、ツァーリは知行地を事実上貴族の財産とした⁽⁹⁰⁾。ピョートル改革のあらゆる重荷にもかかわらず、ツァーリについてのよき思い出を抱きながら、貴族はツァーリに感謝し、概してピョートルを支持したことは驚くことではない。

しかし個人的な経営のインシアティヴの結果によって貴族を豊かにしたのち、国家はまさにこのことによって貴族に知行地を分与する義務からも免れることになった。そのことは貴族に

おける土地の動産化（運用）を強化することができただけではなく、ヨーロッパの思想を身に付けることを容易にする個人的精神の要素をも発展させることができた。

まさに 1711 年までの軍事改革の完了は、軍事構造と土地の間にあった以前の関係を断ち切った後に、このことを可能にしたのである。

貴族は、他の社会グループと同様に、新しい「軍事空間」に当分の間「依存していた」。貴族は明確に定まっていた軍事義務を喪失したが、ピョートル一世は決して貴族の軍事勤務の義務を廃止するつもりはなかった。この軍事勤務の義務は、何世紀にもわたって「先祖代々勤務する人々の」主要な義務として、母親の乳とともに体に浸み込んだものであった（プーシキンの『大尉の娘』のなかで、父親による息子ペトルーシャ〔ピョートルの愛称〕・グリニョーフの旅立ちにあたっての饒の言葉を思い起こせば十分である。いわく、「忠誠を誓う相手に忠実に仕えよ。勤務では無理を言うな。勤務を拒否するな」と）。

ピョートル一世は、貴族の勤務義務の原則を、何よりもロシア軍の民族的将校団の形成に利用した。（最初の段階では、将校団の更新と新しい軍事戦略や戦術を身に付けるために必要不可欠な）外国人将校をまったく招聘しないことが彼の主要な課題であり懸念であった。古い構造の破壊は、外国人将校たちが「誠実さが足りない」という理由で将校の名称をつとめて避けてきた首都のエリートを将校団に引き入れるもうひとつの道具となった。いまや彼らが存在する軍事的基盤とその正当化である知行騎兵隊たる「モスクワの百人隊」は、軍事エリートでなくなっただけではなく、新しい軍隊では居場所をみつけることができなかつた。すでに 1700 年に、ピョートルは 1000 人以上の「君主の宮廷」（これは君主の宮廷のほぼ 10 パーセントにあたる）の人々を将校リストに登録した⁽⁹¹⁾。この政策が実行された結果、ピョートル治世における軍隊内の外国人将校の割合は、われわれがすでに指摘したように、3分の1（1696 年の 42 パーセントから 1721 年には 12.6 パーセント）にまで減少したのである。

17 世紀において以前の勤務の「集団主義的団体の心理」を断ち切る、将校団における個人的勤務と個人的出世の原則は、集団主義的な「名誉」「官位」「家柄」を守るためではなく、個人の「私的な名誉」を守ろうとするヨーロッパ的な心理を獲得するいまひとつの「梃」となった。この個人の「私的な名誉」は、同じように個人的に主張して（決闘に至るまで）守らなければならないものだった。その結果、「名誉」の概念そのものが、17 世紀と比較すると、18 世紀には原理的に変化した。

軍隊勤務義務を維持することは、貴族にとって否定的な結果をももたらした。

第 1 に、5300 人を数える将校団は、そのなかには貴族がおよそ 70.2 パーセントを構成していたが⁽⁹²⁾、貴族の全構成員（少なくとも 2 万 2000 人～2 万 4000 人）を吸収することはできず、一部の貴族は改めて最下級の担税身分の人々（おそらくは自分の所有の農民）と「同列に」並び、連隊で兵卒として勤務せざるをえなかつたのである。しかしこれも何か新しい制度という

わけではなかった。同様なことは、少なくとも歩兵連隊においては、アレクセイ・ミハイロヴィチの改革時から存在していた。おまけにピョートル時代には、伝統にしたがって、貴族は連隊構成上「貴族」がより多い騎兵隊に向かうことになった。

第2に、季節ごとに領地に帰還することのない常備軍での勤務は、自身が経営に従事する可能性を奪い、領地に残っていた家族との亀裂を惹き越した。これは貴族にとっては重大な問題だった。

こうした「改革の代償」は、18世紀において、勤務条件の緩和（兵卒による勤務の回避、長期休暇の提供、勤務期間の制限）⁽⁹³⁾、その後における勤務義務の撤廃を求める貴族の長期におよぶ闘争へ引き込む原因となった。

さらにいまひとつのピョートル一世の軍事改革の否定的結果は、勤務都市（軍事＝領域的社団）、および身分的で地方の領土的な利益に関して保護の合法的な可能性を喪失した貴族の社団化そのものの崩壊が完了したことである（17世紀には特徴的だった集団嘆願の大量の流れが18世紀には明らかにみられなくなった）。治世の最後に社団の形式を部分的に復活させるピョートルの遠慮がちな試みは重大な問題を生んだが、その形式が発展することはなかった。「宮廷クーデター」の形で政治活動への強制的介入によって脅かす親衛隊の社団化が合法的なものに取って代わったのである。さらにもう一つの障害となったのが貴族の義務的勤務で、これはまったく領域的な原則に関係がなく、しかも貴族はこの義務的勤務によって領地を留守にすることになった。この問題が解決したのはやっとエカチェリーナ二世の時代で、貴族の義務的勤務が廃止され、地方の領域的な貴族の社団化の基盤を再生した後だったのである。

おわりに

以上のように、ピョートルの軍事改革はアレクセイ・ミハイロヴィチのそれとは原則的に異なっていた。ピョートルの改革は18世紀ロシアの発展の新たなベクトルを規定する軍事・社会構造のより深化した近代化および西欧化に向かうことになった。

しかし、深化した近代化そのものは、アレクセイ・ミハイロヴィチの「移行期」の改革の段階なくしては不可能ではなかったのではないだろうか。その改革は軍事組織の古い原則とそれまでの社会構造の基礎を揺さぶり弱体化させた。またより深化した近代化は、「常備の」ヨーロッパ化された軍事構造が機能するといった半世紀前の経験がなくしては不可能であった。そしてこの軍事構造は、ピョートルの父アレクセイ・ミハイロヴィチと兄フョードル・アレクセイヴィチによって「新編制」連隊として創設され強化されたものだった。

付 記

本稿は РФФИ の財政的支援によって準備された。プロジェクト番号 20-09-42048

(The reported study was funded by RFBR, project number 20-09-42048)

訳者解説

まず第1に、著者のニコライ・ニコラエヴィチ・ペトルヒンツェフの経歴と業績について紹介しよう。同氏は1961年にロシア連邦共和国ヴォログダ州に生まれた。1979～84年にモスクワ国立大学歴史学部封建時代史講座で学んだ後、大学院に進学している。1990年に「アンナ・イオアンノヴナ治世初期の国内政治プログラムおよび陸軍と海軍に関する政策。1730～1735年」で歴史学博士候補（欧米のPh.D.に相当）の学位を取得し、2001年には「アンナ・イオアンノヴナの治世：内政方針形成の諸問題（1730～1740年）」により歴史学博士の学位が授与された。職歴に関しては、1984～2005年（大学院修士・博士課程における研究の中断を含めて）のリベック国立教育大学歴史学部での勤務を経て、2005年からロシア科学アカデミー国民経済・国家勤務研究所（РАНХиГС）リベック市支部に異動となり、同人文科学・自然科学学科講座教授として現在に至っている。

専門書として、博士候補論文を基にした『アンナ・イオアンノヴナの治世：国政方針の形成と陸軍と海軍の運命』（サンクト・ペテルブルク、2001年）、博士論文に基づく浩瀚な『アンナ・イオアンノヴナの内政（1730～1740年）』（モスクワ、2014年）があり、いずれも18世紀ロシア史を研究するための第一級で重要な文献となっている。また、大学教育のための教科書・参考書、『世界文化史20講』（モスクワ、2001年）も執筆している。

自身が編集した論文集にローレンツ・エッレンとの共編『ピョートル改革期およびその後のロシアの統治エリートと貴族（1682年～1750年）』（モスクワ、2013年）がある。さらに論文は80点以上を数える。とくに重要なのは、「ロシア史における一要素としての統合の持続、および16世紀ロシアにおける社会政治発展へのそのインパクト」（*The State in Early Modern Russia: New Directions*. Paul Bushkovich, ed. Bloomington, IN: Slavic Publishers, 2019. pp. 97-131）、「ピョートル一世へのヨーロッパによる初期の影響に関する諸問題：17世紀末におけるパトリック・ゴードンとフランツ・レフォルト」（『*Quaestio Rossica*（ロシア探求）』、2017年、第1号）、「17世紀における勤務『都市』の構造、力学およびヒエラルヒー」（『ロシア世界ノート』56/1、2015年1～3月号）、「アレクセイ・ミハイロヴィチ（とくに1663年）の軍事改革における『財政戦争』と『新編制軍』連隊の将校団」（『*Quaestio Rossica*』、2014年）、「貴族身分の統合とその用語形成の諸問題」『ピョートル改革期およびその後のロシアの統治エリートと貴族（1682年～1750年）』（モスクワ、2013年、所収）、「ピョートル大帝のバルト海戦略」『バルト海におけるロシア。権力の帝國的戦略および知覚の文化的パターン（16～20世紀）』（バルト海の歴史に関する史料および研究）第22巻、ウィーン・ケルン・ワイマール、2012年）、「16世紀ロシアにおける農民の農奴化における諸原因」（『歴史の諸問題』2004年、第7号）、である。

第2に、明治大学との関わりについてである。2019年6月20日（木）～6月29日（土）

にわたり、訳者の申請に基づき2019年度春学期研究者交流支援制度（Researcher Mobility Grant）の支援を得て氏は招聘された。研究者向けの講演とシンポジウムを開催して研究者・大学院生と学術交流をし、さらには学生に向けた講義を行なった。

具体的には、6月21日（金）に、「ドストエフスキーと小説『カラマーゾフの兄弟』の構成の基礎となる神話」（於早稲田大学・ロシア東欧研究所）と題する講演を行った。『カラマーゾフの兄弟』で、いかにドストエフスキーがキリスト教受容以前のロシア固有の時間と空間を小説に組み込んでいったのかをさまざまな側面から解説し分析している。従来の文学研究には見られない新鮮な研究テーマの展開が見られた。6月22日（土）には、訳者が組織したシンポジウム「ロシアの近代化過程を考察する—ペトルヒンツェフ教授を招聘して」（於明治大学）で、「アレクセイ・ミハイロヴィチとピョートル一世—二つの近代化する軍事改革とロシア社会へのその影響」と題する基調講演を行った。ロシアの近代化についての議論は従来ピョートル一世から始まるとされてきたが、これをその父であるアレクセイ帝にまでさかのぼって具体的にその軍事改革に焦点を当てて論じた。詳細なアレクセイ帝時代の軍事改革の諸相、それによって引き起こされる社会構造の変化について、これまでにないロシア近代化についての新たな視点を提示した。今回訳出した論文の基になる報告である。

また6月26日（水）には、明治大学文学部西洋史学専攻の学生を対象とした連続講義を行っている。1時限目の授業は、「16世紀中葉～17世紀中葉のロシア国家の統合過程の完成、封土（領地）システムおよびそれに基礎を置く軍事・社会構造の形成」（於和泉キャンパス・図書館ホール、1・2年生対象）である。2時限目の授業は、「中世ロシア人の世界の想像および社会についての観念を表すものとしての16～17世紀初頭のロシア・イコン」（於同上、1・2年生対象）であった。3・4時限目の授業は、「封土（領地）システムの終焉：アレクセイ・ミハイロヴィチ帝の近代的軍事改革とロシア社会の構造的変貌」（於駿河台キャンパス・2091教室、3・4年生対象）であった。いずれも極めて質の高い、ロシア中近世史の歴史的問題を美術や宗教といった隣接諸科学との融合の上で考え直すことを目指す意欲的ながらも、学生たちからも多くの質問が出るほど興味深い内容であった。

第3に、本論の特質についてである。今回のテーマは、著者の現在の関心の中心となっている17世紀の軍事状況を考察するための前提である。すなわちアレクセイ・ミハイロヴィチ帝の軍事改革がその子であるピョートル一世のそれよりも先んじて大規模に行われたこと、しかも両者の特徴と差異を明らかにすることである。その基本的方向性については、上述の2019年6月22日のシンポジウムでの講演で述べたものであるが、訳者の求めに応じて新たに書き改めたものとなっている。それは、従来の研究と比べて新しい視点を提示し、またそれを裏付ける史料的根拠を示しているのである。

ピョートル改革を挟んだロシアの17世紀と18世紀の差異の強調については、欧米の研究の

うち、次々と新たな視点を提示していたアメリカの近世史家マーク・ラエフによる指摘が現在も大きな指標となっている (Raeff, M. "Seventeenth-Century Europe in Eighteenth-Century Russia?", *Slavic Review*, 41 (1982), pp. 611-619)。このラエフの考えに対して、差異ではなく制度的・文化的な側面から17世紀と18世紀の連続性を見ようとする見解が同誌掲載のP. キーナンやI. de マダリアーガたちから提出された。その意味では、ピョートル一世の改革がすでに17世紀に準備されていたということは指摘されて久しい。また17世紀についてはあるが、軍事編制と社会構造の問題を理解する上で、鳥山成人の研究は日本の研究水準を示している(鳥山成人「第8章 初期ロマノフの政治・経済・社会 4」『世界歴史大系 ロシア史 1』山川出版社, 1995年)。

しかし18世紀ロシアは、前世紀の何をまたどのように継承していたのかとなると必ずしも明確ではなかった。訳出したペトルヒンツェフの論文は、まさにこの問題に焦点を当てて、アレクセイ・ミハイロヴィチの軍事改革がピョートルのそれをどのように準備していたのかということ、また両者の改革にどのような異同があったのかという点を明確にしている。しかも、軍隊編成の実態や軍隊維持のための国家による財政的負担という軍事改革の中身に止まらず、さらには軍隊を支えた貴族層の質的变化とその他の身分の編成上の変化、つまるところ改革による社会構造の変化にまで言及しているのである。言い換えると、17世紀から18世紀における軍事改革を、国家と社会の全般的な変革との関連で見直すという大きな視点を持ち込んで論じているのである。以上の点は、古文書史料の十全な利用に裏打ちされたものとなっている。

注

- (1) Roberts M. "The Military Revolution, 1560-1660." In: Roberts M., *Essays in Swedish History*, London. 1967, pp. 195-225; Bean R., "War and Birth of the Nation State," *The Journal of Economic History*, vol. 33. № 1 (Mar., 1973), pp. 203-221; Parker G., "The "Military Revolution, 1560-1660 – a Myth?" *The Journal of Modern History*, vol. 48, № 2 (June 1976), pp. 195-214; Parker G., *The Military Revolution. Military Innovation and the Rise of the West, 1500-1800*, Cambridge. 1988; Lynn J.A., "Review Essay: Clio in Arms: The Role of the Military Variable in Shaping History," *The Journal of Military History*, vol. 55, № 1 (Jan., 1991), pp. 83-95; Downing B., *The Military Revolution and Political Change*, Princeton. 1992; Childs J., "The Military Revolution I: The Transition to Modern Warfare," *The Oxford Illustrated History of Modern War*, Oxford. 1997, pp. 19-34; Parker G., "The "Military Revolution" 1555-2005: from Belfast to Barcelona and the Hague," *The Journal of Military History*, № 69 (Jan., 2005), pp. 205-209. および多くの研究がある。
- (2) ロシアにおける「軍事革命」の影響と関連する経過は、M. ポーの諸論文で論じられている (Poe M., "The Consequences of the Military Revolution in Muscovy in Comparative Perspective," *Comparative Studies in Society and History*, 1996, vol. 38, № 4, pp. 603-618; Poe M., "The Military Revolution, Administrative Development, and Cultural Change in Early Modern Russia," *The Journal of Early Modern History*, 1998, vol. 2, pp. 247-273); M. Поля (Paul M. "The Military Revolution in Russia, 1550-1682," *The Journal of Military History*, 2004, № 8, pp. 9-46)。および Ch. ダニングと N. スミスの研究 (Dunning Ch., Smith N., "Moving beyond Absolutism: Was Early Modern Russia a "Fiscal-Military" State?" *Russian History*, 2006. vol. 33. № 1, pp. 19-43), 同様に B. B. ベンスコイと C. A. ネフヨードフの論文と研究も参照されたい (Пенской В.В. Военная революция в Европе

- XVI и XVII веков и ее последствия // Новая и Новейшая история. 2005. № 2. С. 194-206; *Пенской В.В.* Военная революция XVI - XVII вв. и ее изучение в зарубежной и российской историографии второй половины XX - начала XXI вв. // Научные ведомости Белгородского университета. Белгород, 2008. Вып. 7. № 5 (45). С. 67-73; *Пенской В.В.* Великая огнестрельная революция. М.: «Эксмо», 2010; *Нефедов С.А.* Демографически-структурный анализ социально-экономической истории России. Екатеринбург, 2005. С. 60-65; *Нефедов С.А.* Теория военной революции: полвека спустя // Известия Уральского федерального университета. Сер. 2. Гуманитарные науки. 2013. № 3. С. 134-141)。
- (3) これについての最近の研究は以下を参照されたい。*Черникова Т.В.* Начало европеизации России во времена Ивана III // Вестник МГИМО университета. 2011. № 5 (20). С. 107-115; Черникова Т.В. Иноземцы в русской жизни XV-XVI вв. // Вестник МГИМО университета. 2011. № 6 (21). С. 146-152 ; *Черникова Т.В.* Западные служилые иноземцы и придворные врачи во времена Ивана Грозного // Вестник МГИМО университета. 2012. № 4 (25). С. 33-41.
- (4) *Штаден Генрих фон.* Записки о Московии. Том 1. М.: Древнехранилище, 2008.
- (5) *Маржерет Жак.* Состояние Российской империи. Ж. Маржерет в документах и исследованиях (Тексты, комментарии, статьи) / Под ред. А.Н. Береловича, В.Д. Назарова, П.Ю. Уварова. М.: Языки славянских культур, 2007.
- (6) *Сташевский Е.Д.* Смоленская война 1632-1634 гг. Организация и состояние московской армии. Киев, 1919; *Менишиков Д.Н.* Смоленская война 1632-1634 гг. и начальный этап реформирования московской армии. Дисс... канд. исторических наук. СПб., 2009; *Он же.* Боевая сила армии М.Б. Шеина в Смоленском походе 1632-1634 г. // Вестник Санкт-Петербургского университета. Сер. 2. История. 2008. Вып. 4. Ч. 1. С. 10-16.
- (7) *Поршнев Б.Ф.* Тридцатилетняя война и вступление в нее Швеции и Московского государства. М.: «Наука», 1976. С. 232-242.
- (8) 彼らについては次を参照されたい。*Орленко С.П.* Выходцы из Западной Европы в России XVII века (правовой статус и положение). М.: Древнехранилище, 2004; Иноземцы в России в XV-XVII в. Сборник материалов конференций 2002-2004 г. М.: Древнехранилище, 2006; *Опарина Т.А.* Иноземцы в России XVI - XVII вв. М.: Прогресс-Традиция, 2007; *Скобелкин О.В.* Западноевропейцы на русской военной службе в XVI - 20-х гг. XVII в. Дисс... доктора ист. наук. Воронеж, 2015.
- (9) *Лисейцев Д.В., Рогожин Н.М., Эскин Ю.М.* Приказы Московского государства XVI - XVII вв. Словарь-справочник. М.-СПб.: Центр гуманитарных инициатив, 2015. С. 68-71.
- (10) われわれの試算は次の史料に拠った。「Сметы воинских сил 1651 г. (1651 年の軍事力の予算)」すなわち「Смета великого государя ...царей, царевичей, и бояр ... и всяких служилых людей нынешнего 159 году」/ Дворянство России и его крепостные крестьяне XVII - первой половины XVIII в. М., 1989. С. 8-32 (далее – Смета 1651 г.). とくに С. 16-17, 19-21. «Сметы воинских сил 1651 г. (1651 年の軍事力の予算)」における総数とその史料を基にしたわれわれの計算は必ずしも一致しているわけではない。そのため丸括弧にその数字を記入した。
- (11) 次の史料に拠った。Смета 1651 г. С. 19-21.
- (12) この問題は C . A . ネフョードフによって提起された。*Нефедов С.А.* Первые шаги на пути модернизации России: реформы середины XVII века // Вопросы истории. 2004. № 4. С. 22-52.
- (13) *Чернов А.В.* Строительство вооруженных сил Русского государства в XVII веке. Диссертация на соиск. ученой степени докт ист. наук (до Петра I). М., 1950; *Чернов А.В.* Вооруженные силы Русского государства в XV - XVII вв. М., 1954.
- (14) *Hellie, Richard, Enserfment and Military Change in Muscovy*, University of Chicago Press. 1971; *Stevens, Belkin Carol, Soldiers on the Steppe*, Northern Illinois University Press: DeKalb. 1995; *Davies, Brian L., State Power and Community in Early Modern Russia. The Case of Koslov, 1635-1649*, Palgrave Macmillan. 2004; *Steven, Belkin Carol. Russia's Wars of Emergence, 1460-1730.* Pearson Education. 2007; *Davies, Brian L., Warfare, State and*

- Society on the Black Sea Steppe, 1500-1700*, Routledge. 2007; Davies, Brian L., *Empire and Military Revolution in Eastern Europe*. Continuum, 2011; *Warfare in Eastern Europe*. Brill, 2011.
- (15) Малов А.В. Московские выборные полки солдатского строя в начальный период своей истории. 1656-1671. М., 2006; Курбатов О.А. Организация и боевые качества русской пехоты «нового строя» накануне и в ходе русско-шведской войны 1656-1658 гг. // Архив русской истории. Вып. 8. М.: «Древнехранилище», 2007. С. 175-197; Он же. Роль служилых «немцев» в реорганизации русской конницы в середине XVII в. // Иноземцы в России в XV-XVII в. Сборник материалов конференций 2002-2004 гг. М., 2006. С. 18-34; Он же. Очерк истории конных полков «нового строя» русской армии от начала их существования до окончания русско-шведской войны 1656-1658 гг. // Единорог. Вып. 3. М., 2014. С. 90-136; Он же. Военные реформы в России второй половины XVII в. Конница. М., «Квадрига», 2017; Рогожин А.А. Генералитет полков «нового строя» в России второй половины XVII века. Дисс. ... канд. ист. наук. Орел, 2014; Он же. Денежное жалование начальных людей полков «нового строя» в конце 1660-х - начале 1680-х гг. (К вопросу о политике русского правительства в области военной экономики) // Война и оружие: Новые исследования и материалы. Труды Четвертой международной научно-практической конференции, 15-17 мая 2013. СПб., ВИМАНИВС., 2013; Он же. Генералы полков «нового строя» в 1650-е - 1690-е гг. / Русская военная элита. М.,-Севастополь., 2015. С. 79-96.
- (16) Андреев И.Л. Алексей Михайлович. М., 2003; Козляков В.Н. Царь Алексей Тишайший. Летопись власти. М., 2018.
- (17) この軍事衝突の経過と基本的な作戦は次の最近の研究で描かれている。Курбатов О.А. Русско-шведская война 1656-1658 гг. М.: «Руниверс», 2017; Он же. Русско-польская война 1654-1667 г. М.: «Руниверс», 2019.
- (18) Курбатов О.А. Организация и боевые качества русской пехоты ...С. 175-197.
- (19) Малов А.В. Московские выборные полки ...С. 91.
- (20) 軍管区 (ラズリヤード) と「軍管区」という用語そのものの多義性については次を参照されたい。Курбатов О.А. Областные разряды царского войска: от воеводских росписей до военных округов // Белгородская черта. Сб. ст. Вып. 2. Белгород: «Константа», 2017. С. 3-15.
- (21) 最初の軍管区の形成については以下を参照されたい。Великанов В.С. Росписи русской армии по разрядным полкам в 1650-1680-е гг.: попытка создания военно-окружной системы // Военно-исторический журнал. 2018. № 12. С. 16-21.
- (22) Милоков П.Н. Государственное хозяйство в России в первой четверти XVIII в. и реформа Петра Великого. СПб., 1892. С. 221-256.
- (23) Petrukhintsev N. "The Baltic Strategy of Peter the Great," *Russland an der Ostsee. Imperiale Strategien der Macht und kulturelle Wahrnehmungsmuster (16 bis 20. Jahrhundert)*. Quellen und Studien zur Baltischen Geschichte, Band 22, Wien – Köln-Weimar: Böhlau Verlag. 2012, S. 169-189.
- (24) ПСЗ. Т. 4. № 2319. 19 февраля 1711 г. – «Штаты кавалерийских и пехотных полков, с показанием расположения оных по губерниям».
- (25) Малов А.В. Конница нового строя в русской армии в 1630-е—1680-е гг. // Отечественная история. 2006. № 1. С. 118-131.
- (26) 以下の史料「1661～63年の予算」に拠って計算した。Веселовский С.Б. Сметы военных сил Московского государства 1661-1663 гг. // ЧОИДР. Кн. 3. 1911. С. 4-54.
- (27) それらについては次を参照されたい。Дмитриев А.В. Личный состав сибирских полков «нового строя» во второй половине XVII века (Статья первая) // Вестник Новосибирского госуд. ун-та. Серия: история, филология. 2006. Т. 5. С. 19-23 ; Он же. Личный состав сибирских полков «нового строя» во второй половине XVII века (Статья вторая) // Вестник Новосибирского госуд. ун-та. Серия: история, филология. 2007. Т. 6. С. 16-21.

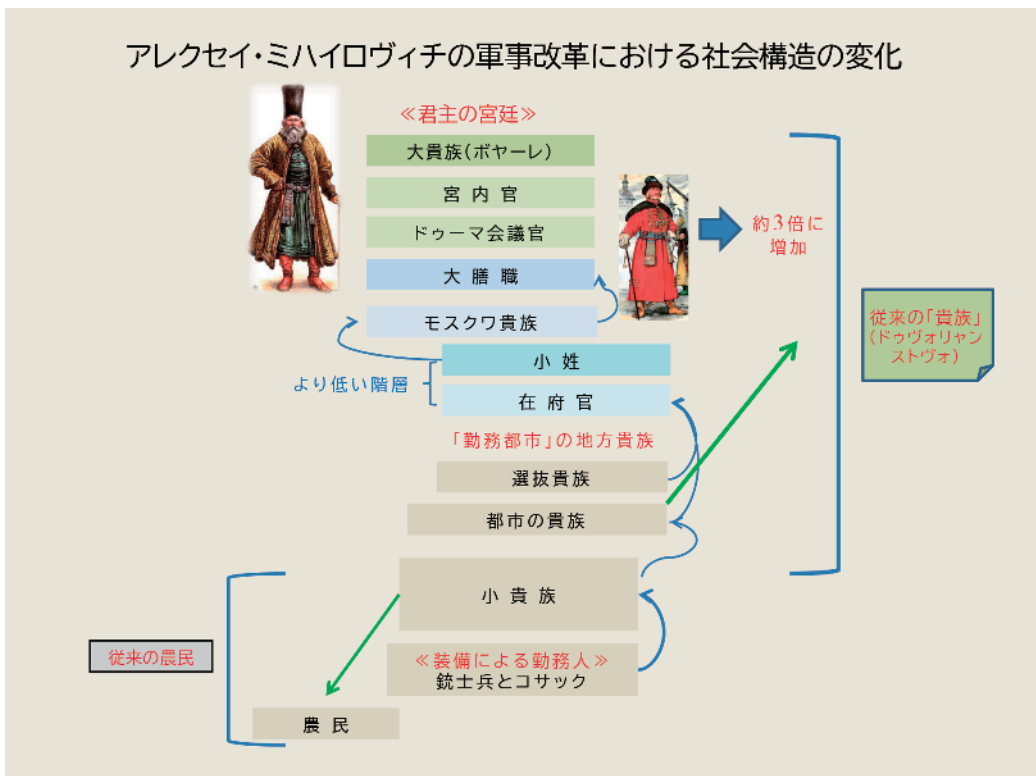
- (28) *Веселовский С.Б.* Сметы военных сил... С. 26-27.
- (29) 以下のものに拠った。ПСЗ. Т. 43 (Книга штатов). Ч. 1. Штат армии от 19 февраля 1711 г. К № 2319. С. 1-3. ピョートル時代のほぼ同じ連隊数で戦闘を行なう兵卒の比較的大きな数は、かなりの程度、中隊が、当時の定員に一致し、備騎兵中隊と歩兵中隊は伝統的な「百人隊」に近似し、連隊は徐々に基本的には「千人隊」に変化した、ということによって説明される。ところが、アレクセイ・ミハイロヴィチの軍隊における 1661～1663 年の中隊の定員が厳格に順守することを阻害したのである。
- (30) *Рогожин А.А.* Генералитет полков «нового строя» в России второй половины XVII века. Дисс. ... канд. ист. наук. Орел, 2014; *Рогожин А.А.* Генералы полков “нового строя” в 1650-е - 1690-е гг. // Русская военная элита. М.- Севастополь, 2015. С. 79-96.
- (31) *Петрухинцев Н.Н.* «Финансы войны» и офицерский корпус полков «нового строя» в военной реформе Алексея Михайловича (1663 г.) // *Quaestio Rossica*, 2014. № 2. С. 263-292.
- (32) *Великанов В.* Иностранцы офицеры в русской армии, 1696 и 1721 гг. // <http://rusmillhist.blogspot.com.au/2015/09/foreign-officers-in-russian-army-1696.html#more>, 8 сентября 2015 г.
- (33) 詳しくは次を参照されたい。*Петрухинцев Н.Н.* Некоторые тенденции в развитии иноземного офицерского корпуса России в конце XVII – начале XVIII в. / Война и оружие. Новые исследования и материалы. Труды второй международной научно-практической конференции. 16-18 мая 2012 г. Часть II. СПб. ВИМАИВиВС. 2011. С. 219-240.
- (34) *Цветаев Д.В.* Протестантство и протестанты в России до эпохи преобразований. М., 1890. С. 256.
- (35) *Гордон П.* Дневник. 1659-1667. М., 2003. С. 122, 163; *Цветаев Д.В.* Протестантство и протестанты в России... С. 291.
- (36) *Гордон П.* Дневник. 1677-1678. М., Наука. 2005. С. 7.
- (37) РГАДА. Ф. 210. Моск. стол. Ст. 629. Л. 19, 43, 58, 86-88, 114, 311, 359, 354 и др.
- (38) РГАДА. Ф. 210. Моск. стол. Ст. 629. Л. 58-60.
- (39) РГАДА. Ф. 27. Оп. 1. Д. 118. Ч. 1. Л. 162.
- (40) Описание второго посольства в Россию датского посланника Ганса Ольделанда в 1659 г. // Утверждение династии. М., 1997. С. 25-26.
- (41) *Лобин А.Н.* Артиллерия московских стрелецких полков во второй половине XVII в. // *Бомбардир*, 2007. № 19. С. 88-96; *Он же.* Артиллерия московских стрелецких полков в 1670-1680 гг. [Электронный ресурс] // История военного дела: исследования и источники. 2012. Т. II. С. 1-41; *Он же.* «Большой голландский наряд» во второй половине XVII в.: опыт организации артиллерии по военному образцу // Военное прошлое государства Российского: утраченное и сохраненное. Материалы Всероссийской научно-практической конференции, посвященной 250-летию Достопамятного зала, 13-17 сентября 2006. ВИМАИВиВС. Ч.3. СПб., 2006. С. 10-14.
- (42) *Татищев В.Н.* История Российская. М-Л., 1962. Т. 1. С. 87.
- (43) РГАДА. Ф. 210. Белгородский стол. Стб. 1645. Л. 121, 617-627 и др.
- (44) こうしたシステムの特徴を明らかにしている最近の諸研究のうち特に次を参照されたい。*Козьяков В.Н.* Служилые люди России XVI-XVII веков. М.: «Квадрига», 2018; *Бенцианов М.М.* «Князья, бояре и дети боярские». М.: «Центрполиграф», 2019.
- (45) Правящая элита Русского государства IX - начала XVIII в. (Очерки истории). СПб., 2006; *Новосельский А.А.* Правящие группы в служилом «городе» XVII в. // Ученые записки института РАН ИИОН. М., 1928. Т.5. С. 315-335; *Он же.* Распад землевладения служилого города в XVII в. (по десятиям) / Русское государство в XVII веке: новые явления в социально-экономической, политической и культурной жизни. М., 1961. С. 231-253; *Козьяков В.Н.* Служилый «город» Московского государства XVII века (от Смуты до Соборного уложения). Ярославль, 2000; *Лантеева Т.А.* Провинциальное дворянство России в XVII веке. М., 2010.
- (46) こうした構造は 19 世紀後半に作られ、19～20 世紀の世紀転換期、Н.П. Павлов = シリヴァンスキー

- の研究の後、最終的に形成された。*Павлов-Сильванский Н.П.* Государевы служилые люди. Происхождение русского дворянства. СПб., 1898. С. 220-222; 242-243.
- (47) *Колман Н.-Ш.* Соединенные честью. Государство и общество в России раннего нового времени. М., 2001. С. 105; *Фриз Г.Л.* Сословная парадигма и социальная история России // Американская русистика: Вехи историографии последних лет. Императорский период: антология. Самара, 2000. С. 126-127.
- (48) たとえば次の研究を参照されたい。*Черепнин Л.В.* Земские соборы русского государства в XVI - XVII вв. М., 1978. С. 278-279, 283.
- (49) *Высоцкий Д.В.* Коллективные дворянские челобитные XVII в. как исторический источник // Вспомогательные исторические дисциплины. Вып. XIX. Л., 1987. С. 125-138; *Лантеева Т.А.* Провинциальное дворянство России в XVII веке. М., 2010. Гл. 4. С. 422-479.
- (50) *Андреев И.Л.* «Достоверный охотник» (к вопросу о месте и роли службы в XVII веке) / Герменевтика древнерусской литературы. Сб. ст. РАН. Ин-т мировой литературы им. А.М. Горького. М.: Наследие, 2000. С. 460-474.
- (51) Stevens, Belkin Carol, *Soldiers on the Steppe.*
- (52) その例を1679年のキーエフ遠征の軍隊構成に見ることができる(Книги разрядные, по официальных оным спискам. Т. 2. СПб., 1855. Ст. 1192-1200)。あるいは1676年の遠征における В. В. Грорин-Тинの軍隊の名簿、および1681年の軍管区(ラズリャрд)連隊への細分を伴うロシア軍の全名簿を例にすることができる Голицына в походе 1676 г. и общие списки русской армии с делением на разрядные полки в 1681 г. (РГАДА. Ф. 210. Московский стол, Кн. 75. Л. 1-101)。
- (53) Доклады и приговоры, состоявшиеся в правительствующем Сенате в царствование Петра Великого. Т. 1. СПб., 1880. Кн. 1. С. 44; 66; Кн. 2. С. 165; Т. 2. СПб., 1882. С. 24, 84-85, 97; Т. 3. Кн. 1-2. СПб., 1887-1888. С. 33; 110-111; 116; 586-587; ПСЗ. Т. 4. № 2513.
- (54) Доклады и приговоры... Т. 1. СПб., 1880. Кн. 1. С. 66.
- (55) 次の史料から計算されたものである。РГАДА. Ф. 27. Оп.1. Д. 84. Ч. 3. Л. 1-16.
- (56) *Важинский В.М.* Усиление солдатской повинности в России в XVII в. // Известия Воронежского государственного педагогического института. Т. 157. Воронеж, 1976. С. 57, 61-62.
- (57) 次の史料から計算されたものである。「Смет» 1651 и 1663 гг.
- (58) *Романов М.Ю.* Стрельцы московские. М., 2004. С. 53; *Великанов В.С., Нечитайлов М.В.* «Азиатский дракон перед Чигирином...». Чигиринская кампания 1677 г. М., Русские витязи. 2019. С. 56 (21,5-22 тыс. чел.).
- (59) *Лантеева Т.А.* Дворянство «городов» Новгородского разряда по итогам разборов начала XVIII в. // Правящие элиты и дворянство России во время и после петровских реформ (1682-1750). М., «РОССПЭН», 2013. С. 398-407.
- (60) 1654年の第1次ロシア=ポーランド戦争に向けて指揮官構成員が形成された例を次の史料から見るることができる。РГАДА. Ф. 27. Приказ тайных дел. Оп.1. Д. 86. Ч. 1. Л. 244-257。またロシア=トルコ戦争の1679年の遠征にあたって、アリストクラートから指揮官を任命することについては次を参照されたい。Книги разрядные... Т. 2. Ст. 1046-1049.
- (61) *Рогожин А.А.* Денежное жалование начальных людей полков «нового строя» в 1660-1680-х гг. // Война и оружие. Новые исследования и материалы. Труды четвертой международной научно-практической конференции. Сб. ст. СПб.: ВИМАИВиВС. 2013. Ч. IV. С. 66-79.
- (62) А. В. Марофの研究はエリート「選抜」連隊の例を示したものである(Малов А.В. Московские выборные полки... С. 155-159)。
- (63) *Мышлаевский А.З.* Офицерский вопрос в России в XVII в. (Очерк из истории военного дела в России). СПб., 1899. С. 38.
- (64) *Петрухинцев Н.Н.* «Финансы войны» ... С. 264-269.

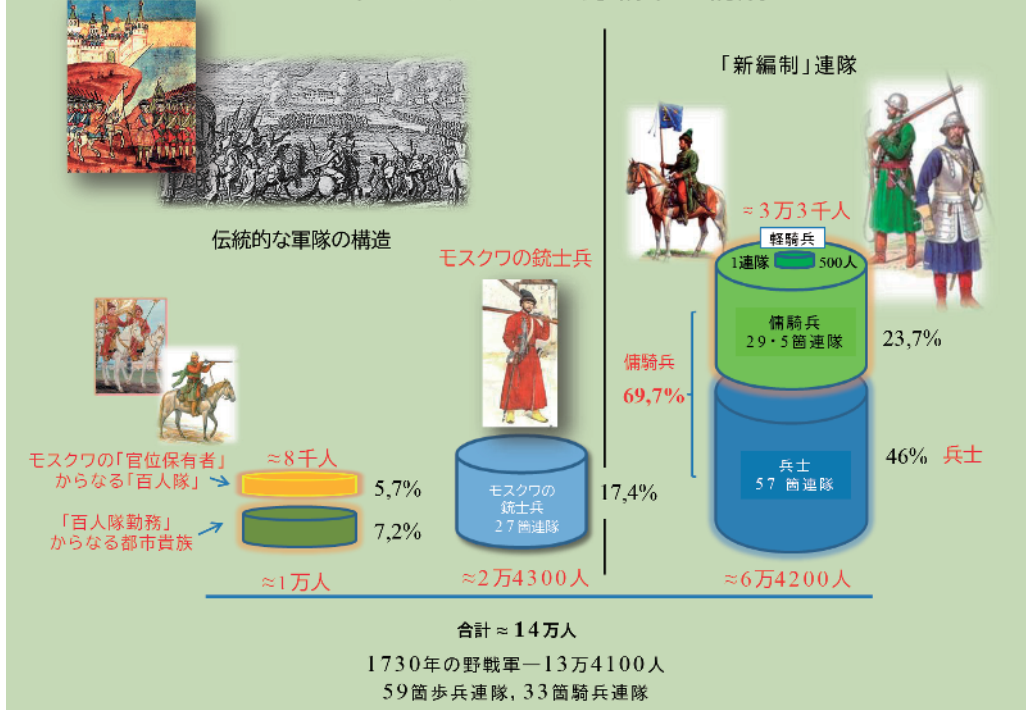
- (65) Belkin, Carol Stevens, *Soldiers on the Steppe*. pp. 56-63.
- (66) Kivelson, Valery A., *Autocracy in the Provinces. The Muscovite Gentry and Political Culture in the Seventeenth Century*. Stanford, California: Stanford University Press. 1997, p. 31, Sh. 1. 2.
- (67) Седов П.В. Правящая элита русского государства 1660-1680-х гг. / Правящая элита русского государства IX – начала XVIII в. (Очерки истории), СПб.: Дмитрий Буланин. 2006. С. 407.
- (68) Там же. С. 407.
- (69) Павлов А.П. Правящая элита Русского государства второй половины XVI - первой половины XVII в. / Правящая элита русского государства IX - начала XVIII в. С. 355.
- (70) Захаров В.Н. Государев двор Петра I. Публикация и исследование массовых источников разрядного делопроизводства. Челябинск: Изд-во Челябинского государственного университета, 2009. С. 8.
- (71) われわれの試算によると、「1651年の予算(Смете 1651 г.)」における「先祖代々勤務する人々」の総数は3万9130人であった。しかし、この構成員に隣接するカテゴリーである勤務カザークの上層を勘定に入れる「予算」を刊行した人たちの試算によると、4万124人である。
- (72) 次の研究から試算した。Водарский Я.Е. Население России в конце XVII - начале XVIII вв. (Численность, сословно-классовый состав, размещение). М.: «Наука», 1977. С. 69-70.
- (73) Черненко Д.А. Землевладение и хозяйственно-демографические процессы в Центральной России XVII-XVIII вв.: опыт региональной типологии. Вологда, 2008. С. 155,182 (これはスーズダリやアレクシンスク郡を例にとっている)。
- (74) Водарский Я.Е. Указ соч., С. 64.
- (75) 「保護都市」については次の研究を参照されたい。Загоровский В.П. Белгородская черта. Воронеж, 1969. С. 128-129; Важинский В.М. Землевладение и складывание общины однодворцев в XVII в. (по материалам южных уездов России). Воронеж, 1974. С. 66.
- (76) Лаптева Т.А. Провинциальное дворянство... С. 298-262.
- (77) Там же. С. 362-367.
- (78) この過程はかなりの程度 C. B. Чёрныйニコフの最近の研究に論じられている。Chernikov Sergey, “Noble Landownership in 18-Century Russia: Revisiting the Economic and Sociopolitical Consequences of Partible Inheritance,” *Kritika: Explorations in Russian and Eurasian History*. 17, 2. (Spring 2016), pp. 294-298.
- (79) Петрухинцев Н.Н. Восточный вектор петровских преобразований и предпосылки реформы военных структур России / Петр I и Восток. Материалы XI Международного петровского конгресса СПб.: Европейский дом, 2019. С. 131-154.
- (80) Богословский М.М. Петр I. Материалы для биографии. Т. 4. М.: Л., 1948. С. 172-180, 174.
- (81) Там же. С. 177-181.
- (82) Тихонов В.А. Рекрутская система комплектования русской армии при Петре I. Lambert Academic Publishing, 2012.
- (83) Милюков П.Н. Государственное хозяйство ... С. 101-155 и далее.
- (84) ПБПВ. Т. 9. Вып. 2. С. 1163.
- (85) Там же. С. 1174-1175.
- (86) Hellie, Richard, “The Costs of Muscovite Military Defense and Expansion,” *The Military and Society in Russia. 1450-1917*, Ed. by Eric Lohr and Marshall Poe. Brill. Leiden-Boston-Koln. 2002, pp. 64-65. Tabl. 21.
- (87) Романович-Славатинский А.В. Дворянство в России от начала XVIII в. до отмены крепостного права. СПб., 1870. С. 4; Киселев М.А. Развитие самосознания «дворянского сословия» в первой трети XVIII в. и междуцарствие 1730 г.: «шляхетство» или «фамильные и шляхетство»? / Правящие элиты и дворянство России во время и после петровских реформ (1682-1750). М., 2013. С. 284-319.
- (88) 農民所有の胴体に関するこの身分の基本的グループの特徴は次の研究を参照されたい。Chernikov Sergey V. “Dvorianskaia sobstvennost’ v Rossii 1700-1762 gg. Rodovaya struktura, dinamika, otsenka stabil’nosti

razvitiya [La propriété foncière nobiliaire en Russie de 1700 à 1762: stukture patrimoniale, dynamique, évolution],” *Cahiers du Monde Russe*, 59/1, Janvier-mars 2018, pp. 37-92.

- (89) ПСЗ. Т. 4. № 2789. С. 91.
- (90) 一子相続性に関する法律と土地財産の再分配の過程におけるその影響については以下の研究を参照されたい。L.A. Farrow, “Peter the Great’s Law of Single Inheritance,” *Russian Review*, 55 (3), 1996, pp. 430-447; Черников С.В. “Власть и собственность, Особенности мобилизации земельных владений в Московском уезде в первой половине XVIII века,” *Cahiers du Monde Russe*, 53/1, Janvier-mars 2012, pp. 141-245.
- (91) Богословский М.М. Петр I. Материалы ... Т. 4. М.-Л., 1948. С. 183-185.
- (92) 次の研究から試算した。Рабинович М.Д. Социальное происхождение и имущественное положение офицеров регулярной русской армии в конце Северной войны / Россия в период реформ Петра I. М., 1973. С. 136, 139.
- (93) Фаизова И.В. «Манифест о вольности» и служба дворянства в XVIII столетии. М., 1999; Бабич М.В. Манифест об ограничении сроков дворянской службы 1736 г. в системе политики, административной практики и социальных ценностей в России XVIII в. / Правящие элиты и дворянство России во время и после петровских реформ (1682-1750). М., 2013. С. 81-102.



1699年におけるロシア野戦軍の構成



ピョートル大帝の軍事改革 (1699 - 1711)

